

鳴門秘帖

木曾の巻

吉川英治

青空文庫

送り狼

未明のうちに、本郷森川宿じゆくを出たお綱と万吉とが、中仙道をはかどつて、もうそろそろ碓氷峠うすいとうげの姿や、浅間の噴煙けむりを仰いでいようと思われる頃、——三日おくれて、同じ中仙道の宿駅に、三人づれの浪人を見ることができぬ。

それが、例の、お十夜と、一角と周馬であつた。

こん度の旅は、無論、お綱と万吉のあとを追つて、そのうえに、のりづきげんのじょう法月弦之丞しとを刺止めるまでの目的だろうに、わらじ、野袴のばかま、あみがさ編笠あみがさという、本格の支度をしているのは天堂一角だけで、周馬

は笠なし、お十夜は、笠もわらじも嫌いだといって、素のまま着流しに草履ばきという風態。

まだ軽井沢ぐらいいいだが、それから先の和田峠、猪の字ヶ原の高原、木曾の※所などへかかったら、どうする気だろうと思われるが、小手調べの碓氷峠でも、さして難儀な顔もみせないところは、お十夜も周馬も、旅にはひとかどの見識をもつものとみえる。

「はてな？ ……まさか、おれたちの行く道が見当違いをしていのじゃあるまいな」

上田の城下へ入る前に、追分の辻から佐久街道へ折れて、青々とした麦畑や、菜の花に染め分けられた耕地や森や、千曲の清

いれち
冽などを見渡しながら、フイに、お十夜がこう言いだした。

「なぜ？」

と、ふりかえったのは天堂一角。

根岸の闇で、法月弦之丞にやられた太刀傷たちきずが致命にいたらなかつたまでも、かなり深傷ふかでであつたとみえて、いまだに左手を首に吊っているのが、いかにも暴勇な剣客らしく目立って、往來の者が必ず、ふりかえってゆく。

「冗談じゃアねえ」

と、お十夜はふところ手で、

「もう江戸から四十里余り、三晩も泊りを重ねているのに、行つても行つても、万吉とお綱の姿が先に見当らねえじゃアねえか」

「そのことなら心配は無用だ。まさかに使屋の半次が、口から出放題なことを言いはしまい」

「それなら、もうたいがい追いついている筈だが」

「イヤ大丈夫。実は小諸こもろの立場たてばで念入りに聞いておいたことがある。ちようど、きのうの朝立ちで、それらしい二人づれが、間違はなくこの街道へ折れたという問屋場といやばの話であつた」

「ふうむ……そうか。すると今のところで、日数にしてたツた一日、道のりにして小十里しか離れていない勘定になる。それじゃ、もう一息で追いつけるだろう」

と、お十夜の語気は、景趣の変化につれて旅らしい軽快をもつてきたが、周馬は、いっこう面白くない顔で、どこかで折つた桑

の枝を、杖とも鞭むちともつかずに持って、一番あとからおくれがちに歩いてくる。で、一角が、

「一服やろうではないか」

千曲ちくまの板橋を渡るとすぐに、日当りのいい河原蓬かわらよもぎへ腰をおろ

すと、

「よかろう——少し時間は惜しいが」

とお十夜も煙草入れを出して、きれいな玉石を床しょうぎ几にとつた。

「まだまだ先は永いから、そうあせるには及ぶまい。おい、旅たびか

川わうじ氏

「なんだ」

「少し休息してまいろう」

「さようか」

「貴公、あまり旅を好まぬとみえる」

「旅は好きだが、どうも、こんどの旅ははなはだ面白くない。人間の感情は正直だ、アテのない道かと思うと一日に十里の旅は楽でない」

「これは頼もしくない言葉。なぜ、今度の旅にアテがないと申されるか」

「孫兵衛や貴殿はいい。しかし、この周馬にとってみれば、こうまでしても、万吉や弦之丞を殺さねばならぬという必要がない」

「ばかなことを。墨屋敷すみやしきを焼いたのはお綱しわざの為業でござるぞ。

また、お千絵をああして奪ったのは万吉でござるぞ、よいか！

そしてそれを傀儡かいらいしたやつは法月弦之丞ではないか。それでも貴公は、きやつらに何の怨みもないか！ いやさ、吾々と力を協あわせて、その怨みうらを思い知らせてやるという気が起こらぬのか」

「どうも大して起こらぬなあ」

「ちイツ。ぶ、武士らしくもないツ」

「お千絵といい、墨屋敷の財宝も、今ではみんな幻滅となつてしまった。その揚句あげくに命がけで、万吉や弦之丞を狙つたところで、何の埋うめあわ合せにもなりはしない。拙者はもうここでお別れいたすよ。江戸へ帰つて寝ていた方がはるかましだ」

「その無念を晴らすがいいではないか。その怨みを！」

「でも——親かたきの仇ではないからなあ」

周馬が歪ゆがんだもの言いぶりに、一角はムツとなつて、

「だれが親の仇だといった？」

煙管きせるを片手にもつて立ち上がった。

相手が、胸板へ迫つてきた血相に、周馬は少し言いすぎたことを後悔したが、行きがかりとなつた唇は心と反対に動いて、

「うわツ面つらなあげ足をとるな！ それまで深い遺恨いこんはもてぬといつたまでの分ぶんではないか」

「ばかなツ」と、一角はそれを睨み返した。

「では、なぜ、江戸を立つ前にそういわぬか。ここまで来た旅先で、面白くもないケチをつける奴だ」

「ケチはつけんよ、ただ旅川周馬一個人の立場について言明しているのだ」

「臆病風おくびようかぜにさそわれてきたのだろう。江戸表にいるうちは、貴様も吾々と合が体たいして、どこまでも、法月弦之丞を討うつと誓い、また、万吉も生かしてはおけぬと罵のつていたではないか」

「それは、そう思ったこともある。しかし、遺恨の怨みというやつは、カツとなったときこそ真剣にもなれるが、明けても暮れても、いつまで火の玉みたいになつてはおられない。ことにサ、旅になんぞ出てみると、よけいに冷静になるからなア」

「じゃアどうでも、吾々と目的を一ツにして行く気はないというのだな」

「オイ天堂氏^{うじ}。よく貴公は目的目的というけれど、これからお綱や万吉に追いついて、なお、弦之丞を討つたにしても、いつたいその暁に、この周馬は何をつかむ勘定になるんだな？ それが拙者には茫^{ぼう}漠^{ぼく}なのだ」

「勘定？ ……フーム、すると貴様はなんだな、すべて最初から、打算^{ださん}一方でかかっているのか。武士の意気地もなく、また、復讐の念慮もなく」

「だれが意気地ばかりで命がけになれるものか。早い話がお手前にしろ、お十夜にしろ、みな胸に一物^{もつ}ある仕事ではないか。――

周馬にはその報酬がない」

「呆^{あき}れてものがいえぬわい。まるで腐った町人根性、もうそんな

似而非侍えせぎむらいとつきあう要はない、いやならここから帰れ帰れ！」

「なんだ、帰れとは！」

周馬も少し目柱めばしらを立てた。

いくら武士の意地立てを軽蔑けいべつしている周馬でも、ここまで罵倒とらされれば存分だ。そして思わず左の手が鯉口へ行つてしまったので、いやでも右の肩が挑戦的に一角の胸に寄りつく。

カチカチと、河原の石で煙管きせるの首をはたきながら、お十夜孫兵衛、こいつアおもしろい、周馬と一角でぶつかり合つて、どんな仲間割れを演じるか、やるまでやらしておいてみよう——という態度で、止めともせず、また葉煙草を悠々とつめている。

「なんだ、帰れとは！」旅川周馬、重ねて癩かんにふるえながら、

「万吉やお綱はとにかく、弦之丞を討つには、お十夜の腕でもまだ心細いから、ぜひ助太刀を頼むと、いんぎんに、なんじ汝が両手をついて頼んだからこそ同道してやったのだ。それを、帰れとはなんだ！ 帰れとはッ」

「やかましいわッ。貴様も多少は頼み甲斐になる奴かと見そこなつて、蜂須賀家の御事情まで洩らしたが、その性根しょうねを聞いていやになった。もう頼まん！ 身どもと孫兵衛とできつと弦之丞を討つてみせる」

「オオ、そんなことは勝手にせい」

「いらざること！ トットと江戸表へ引つ返せ」

「誰が！」と周馬は、パツと袴はかまをはたいて、

「ウム、ここで別れてくれる」と、青筋を立てて歩きかけると、天堂一角、業腹ごうはらでたまらないように、つかんでいた銀延ぎんのべの煙管を、周馬の横顔に叩きつけて、

「ふた股また武士めツ」とののしった。

その煙管が運わるく、小柄こづかのように、コツンと周馬のこめかみを打ったので、さすがのかれも、そのまま後ろをみせて立ち去ることもならず、

「ウヌ！」

と腰の一刀を抜き払って、天堂一角の真眉間まみけんへ跳びかかった。

抜くまでの意気地はあるまいと、周馬の足元を、あまり見くびりすぎていたのと、左手の利きかないために、一角は不意をくらっ

て、あツ——とうしろへ飛びかわしたが、大きな玉石につまずいて、よろりと腰を砕いたので、仆れながら片手払いにパチンと抜きあわせた。

お十夜はニヤニヤ笑って眺めていた、吸いつけた煙管を口にくわえたままです。

この勝負をほうっておいたらどうなるだろう？

天堂一角にして左手の自由がきけば、もちろん、勝目は問うところではないが、まだ繃ほうたい帯のとれぬ片腕が、よほど体のかけ引きを妨さまたげるから、そこに、かなりの力量を減退されるものとみなければならぬ。

一方の周馬はといえば、これは、太刀筋において、グツと劣るが、最初から、あらん限りな罵詈ばりを浴びせられた揚句あげくで、無茶にムラツとした途端の切ツ尖さきであるから、ふだんの周馬の實質よりも、相当な強みを加えている筈だ。

とすると、この仲間われの斬合いは、まず一角六分、周馬四分の力とみて、いずれは双方斬ツつ斬られつ、相あ討いに近いケリをつけるのがおちであろう。

鬪とうけい鶏けいのカケ合せでも見るようにお十夜はこう考えて、冷淡に落ちついていたが、まさか、血をみるまでほうつてもおけず、やツと二人をかき分けて、

「どうしたツていうんだ。周馬も一角も」

と、仔細しさいらしく仲裁に入つた。

「イヤ、どいてくれ！ お十夜」

こうなると周馬は一そう息巻いて、

「あまりといえば口の過ぎた天堂の言い分、叩ツ斬つてくれねば虫が納まらん」

「片腹痛いことを、なんで貴様のようなへ口へ口武士に」

満顔を朱にして、一角も片手にかぶつた大刀を下ろそうとはしない。その太い腕うでづぶし節にはみみずのような血管がふくれている。

「旅先で兄弟喧嘩はよそうじゃねえか。え、一角。オイ周馬」

「ム、しかし、周馬を無事に江戸へ帰すと、阿波の内密を吹ふいちよ

聴ういたさぬ限りもない。拙者は主君のお家のためにも、この二

股^{また}武士を生かしてはおけぬ」

「まさか、いくら周馬でも、そこまで悪気がある訳ではあるまい。まア、このお十夜に任しておいてくれ、周馬の気持はよく分つて
いる」

考えてみれば一角も、法月弦之丞という強敵をひかえている前に、一人の味方を失うのは得策でない。周馬も、一時、カツとした^{かんすじ}疝筋の血が下がつてみれば、もとより、好むところの斬合いではないので、不承^{ふしよう}不承^{ぶしょう}に、イヤ、むしろホツとした気持で、お十夜の扱いに任せることになつた。

で、その晩は、小^{ちいさ}県^{がた}の下和田宿^{しもわだじゆく}に着いて、いかがわしい旅籠^{はたご}でいかがわしい女どもを揚げ、いかがわしい酒^{さかな}と肴^{さかな}で、昼の

仲直りということになり、酔^{えい}がたけなわとなるに及んでは、周馬がいかかわしい三味線に合せて、怪しげな江戸唄の声自慢までやりだした。

これで、酔^{すいちゆう}中の妥協もついた。だいぶ酔ったらしい天堂一角、振分けを解いて、今まで二人に示したことのない、蜂須賀阿波守のお墨^{すみつき}付を出してみせたりした。

そして、天堂一角は、どういう胸算をもっているのか、大望^{たいもう}を遂げて帰国すれば、蜂須賀家では屈指^{くっし}な格式にとりあげられるのは無論のこと、やがてまた、幕府が仆れ蜂須賀家が將軍の職をつぐ日には、自分も、十万石や二十万石の大名に成り上がることになる。つまり、今はその階^{かいてい}梯だと、すばらしい気焔をあげて、

周馬やお十夜の欲望のあまりに小さいことを冷笑した。

その揚句あげくに、いよいよよろれつの廻らぬ舌で、

「だ、だから、貴公たちもすこし大きな慾を、か、か、かいたらどんなものでござる。……女！ あはははは……女なんて、ウーイ、女なんて、ありや、男が畢生ひっせいの力をぶち込むものにはなりませんぞ。うふふふ……ウソとお考えなさるなら、お十夜殿、アイヤ周馬先生、ど、ど、堂島へ出て、万金を賭して相場をやつてごらんない。お、お綱だつて、お千絵様のことだつて頭から消えてしまう。イヤ、当然に消えてしまう！」

と、天堂一角、怖ろしく自信をもつて、また珍らしくグデングデンに酔つて、八戒かいのように寝てしまった。

だが、そんな酔いどれの哲学に頓着なく、お十夜は、座の目ぼしい女をさらつていつのまにか別間へかくれ、周馬もそれに習つて、お千絵様を夢みながら、お千絵様とは似もつかぬ飯盛めしもりと旅のふすまをひツかついだ。

翌朝は、三人とも元気に肩を並べて、霞かすみの晴れるまに大門峠だいもんを越え、和田村をすぎて、やがて午少ひるし過ぎには、和田の大おおとう峠げをのぼりつめた。

佐平治茶屋さへいじで支度をすまして、やおら、立ち上がつて日ざしをみた。まだ七刻ななつにはかなり間がある。諏訪泊すわりには楽な時間。

九輪草りんそうの多い下り道を、少し大股になりかけると、削り落けずしたような絶壁の下から、うねうねと溪谷けいこくに曲つていく道を、先

に、話しながらいく男と女がチラと目に止まった。

山やまの俊しゅん寛かん

花が散る花が散る。

天女にも五衰すいの相そうの悲しみはあるというが、花の梢こずえは、いくら

散つても散つても衰えないで、大地に空に、クルクルクルクル白び

光やっこうの渦を描いてめぐる。

これがほんとの朧おぼろ夜よというのだろう。

微風そよかぜはぬるく耳をなでるが、耳を驚かす音とてはない。空も

森も伽藍がらんも池も山門も、ありとあらゆる象かたちのものが、シットリと

した水みづ氣けをふくんで、錫すずの細さい粉ふんでも舞まつていいるよように光ひる、ほ
のかな春月はるづきがどこかしらにある。

その明ありもきわめて鈍にく、目めをみはればみはるほど、白びやく毫こう
の光ひかりが睫まつげ毛げをさえぎるので、ここはどこかしら？ と思おもい惑まどつて
いるとかすかに一点いっしんの御み灯あかしがみえる。

アア、江戸で有名な、浅草あさくさの觀音堂くわんおんどうだな。

道理だうりで、五重ごじゆうの塔たかがある、淡島あわしま堂どうがある。弁べん天てん山さんの鐘しょう
楼ろうがある。

オヤ、誰たれかきたらしい。

小さい娘むすめの躑あし音おとだ。

なんという可愛かわいらしい小娘こむすめだろう。一人ひとりかと思おもつたら、また同

い年ぐらいな少女が後からくる。何しに今ごろ通るのだろうか？

道づれなのか？ 別々なのか？ だが、どつちにしても、なんと似ている少女だろう。オヤ、いけない、二人ともに目がつぶれている、手探りで歩いている——アアあぶない、あんな方へ。

おいおい、そんな方へ向いてゆくとあぶないよ。

池があるよ。橋は向うだよ。

おーい。聞こえないとみえる。おーい。

空の様様が変わってきた。

花旋風はなつむじにさらわれるなよ、通り魔に肌を切られるなよ。あれ

ツ、盲の小娘はどうした？ 盲の小娘は？ どこかでヒーツと泣

いているようだが……。

しまった。

とうとう池に落ちてしまった。ああ、溺れてゆく、もがいてい
る。

誰か助けてやらないか、観かん世ぜ音おんはアレを救おうとしないのか、
あの盲目めしいの小娘を見殺しにするのか。

いけないいけない、見るまに深いほうへ入ってゆく、アア悲し
そうな顔を向けて——。や！ しかも、しかも！ あれは他人で
はないぞ、わしの娘ではないか、オオわしの娘だ、どっちもわし
の娘なのだ。

早く助けてやってくれい。

誰か——誰か。

わしはあすこへ行くことができない。

誰かいないか、人はいないか。

アア かんぜおんぼさつ 観世音菩薩。

あれは私の娘です。

お千絵です——お綱です。

*

四国阿波あわの国第一の峻峰しゅんぽう、

*

つるぎ山さんの頂いただきから一羽の角鷹くまたか

*

が、バタバタバタと翼を鳴らして斜めに飛び、やがて、模煇もことした霞かすみの底へ沈んで行った。

何かの音におどろかさされて、甲賀世阿弥こうがよあみは、ふツと、深い夢からさめた。

さめて、あたりの現実を見廻してみると、ここは江戸の観音堂でもなく、また花の散る朧おぼろよ夜でもなかった。

江戸の地から何百里を隔て、本土の国とは鳴門の海を隔てた阿波の国——。それも、海を抜くこと六千尺にあまるつるぎ山の洞窟うくつである。

チチ、チチ、と山千禽やまちどりのさえずりが聞こえるから、もう夜は明けているのだろうが、世阿弥の側には、魚油を点した火皿ひざらの燈心が、今のかれの命のように、心細く燃え残っている。

「ああ……」

と世阿弥は、夢の疲れを太く呻うめいた。

この洞窟の中こそ、つるぎ山の間者かんじやろう牢である。かれが十一年

の春秋をくり返した阿波の山牢やまろう。

また今年も、雪が解けて、春がきて、木の芽が吹いた。そして、きょうという日の夜が明けたが、それは、世阿弥にとって何の希望を意味するものでもなかった。

深い洞窟の中は、三間幅げんはばぐらいな板敷となっていて、そこに、藪いござや獣皮が敷いてあった。

ぬらぬらと光って、生きもののような岩の肌からしたたる雫しずくが、冬は氷柱つららとなつて剣つるぎの天井となり、夏はポタポタと乳のごとく清しみず水を降らすので、いつか世阿弥が黒木柱を組んで、その上へ、柏は葉樹くようじゆの葉をたくさんに葺ふいておいたが、それも今では、真ツ黒

に朽ちて、時折、氷より冷やかな白玉を襟すじに落してくる。

「ああ、夢だった……」

やがて世阿弥はこういつて、残り惜しそうな眼をあげた。

夢ほど楽しいものはない。夢はこの山牢を解放して、剣山から江戸までもさまよわせてくれる。今の世阿弥と現実の世の中との交渉は、ただ時折にみる夢だけに繋がれている。

やがて、かれは薄暗い岩窟から外へ這いだした。

そこには、何ものも萌え立たせずにはおかない春の太陽が、ら
んらんと群峰の肩からのぼりかけていた。鶉、樞鳥、駒鳥、岩
乙鳥、さまざまな鳥がその恵みを礼讃し、あたりの山草や植物
も、かがやかしい芽や花に力をみせて、世阿弥の瞳はクラクラと

してしまつた。

「あ……」と、かれは、痛いように、両手を顔に当てながら、洞窟の前からトボトボと低地の水際みずぎわへ下りて行つた。十一年もの間、岩窟に起き伏ししていたせいもあるうが、その姿は、この世の人とは思われない。陽の前に立つても、かれには影がないようだ。

岩から岩へチロチロ流れてくる雪解ゆきげの水に、世阿弥は、ガクリと膝をついた。藁わらでつかねた麻のような髪を濡らして撫なであげた。そして、その清冽せいれつに口をそそぎかけた時、かれは、意外な物を見つけた。あわててうがいの水を吐いて、向うの草むらへ飛びついた。

そこに四、五本の花梨かりんの木が生はえていた。秋から冬にかけて黄色い果実がつく頃には、この樹の実みがもつ特色のある芳香が、世阿弥をひどく慰めてくれるので、友達のような気がする樹である。今みると、その木の根にからむ雑草の中に、一本の、真新しい狩か矢りやが突つ立っている。

抜いてみると、矢羽はぜいたくな鷹たかの石打いしうち、やじりは槓まきの葉形かたのドキドキするものであった。それに錆さびがみえないところから察するに、つい、昨日かきよようの流れ矢であろうと思われる。

「ほ、また誰か、徳島城の者が、山へムダ矢を放ちにきているな……」

こんなことをつぶやきながら、世阿弥はそれをつかんで、洞窟

の前へ戻ってきた。そして、日光に目を慣らしてから、改めて、その矢骨をズーと眺め廻していると、やじり二寸ほど上がったところちんきんぼりに、沈金彫のみで蚤のような細字。

竹屋たけや三位有村みありむら。

という切銘きりめいが読まれた。

「ああ竹屋……竹屋三位？ ……」

かれにも記憶のある名とみえてややしばらく、それをみつめてみると、どこかで明らかかな人声がきこえだした。

「啓之助けいのすけ、啓之助」

「はッ」

「どうした？ 意気地のない奴じゃ」

「イヤ、意気地のないわけではございませんが、さすがに、俱利伽羅坂からぎさか十八町を、ひと息に上つてまいつたので、やや疲労をおぼえました」

「まだ、この上には一ノ森、二ノ森の嶮路けんろがある。そんなことでは心細いぞ」

「いや、とんでもないことを」

「なにがとんでもないことじや」

「春とは申せ、まだ溪谷けいこくには雪があり、藤の森あたりはすこぶる危険でございます」

「ばかを申せ。きょうは是が非でも二ノ森を踏破して、お花畑の天ツ辺てんぺんから三十五社、蟻ありの細道、または人跡未踏つるぎという、剣の刃

渡り、百足虫腹までも、越えてみなければ気がすまぬ」

「なんと仰せあろうとも、まだ五月にならぬうちは、これより上のお供はできません」

「ではこのほう一人で登りつめる」

「また有村様の横紙破りな。万一お怪我のある時には、この啓之助の落度として、殿より御叱責をうけねばなりません。どうぞ、今日はこの辺で、ひとつ日置流のお手際を拝見いたしたいもので」

朽葉一枚こぼれても、カラカラとひびく山中の静寂——、それはだいぶ遠いらしいが、世阿弥の耳へは怖ろしく近く聞こえてくる。

くうこく きようおん
空谷の磴音である。

世阿弥は耳をたてて、その人声のする方へ伸びあがった。

たいそう近くに聞こえらると思つたが、その実在は遠くであつた。かれのおる山牢は、一面の矮わいせい生植物しよくぶつにつつまれた、瘤こぶのような地点だが、そこから見下ろすとズツと麓ふもとにあたる所に、ポチと、二個の寸影すんえいが立っている。

「お、あの人物だな……。だが、山目付やまめつけでもないらしい？ ……」とつぶやくうちに、世阿弥の姿が、ガサガサと樹木をわけて、その人影の方へ下つて行つた。

しかし、ある程度まで下りてゆくと、もうその先へは一步も出

られぬことになっている。

なぜかといえ、つるぎ山のぞ覗き滝の深潭しんたんから穴吹川あなふきがわへ落ちてゆく激流が、とうとうと飛沫ひまつを散らしている上に、その岩壁に添つて、瘤山こぶやまの瀬をグルリと柵さくでめぐらしてあるからである。

つまりこの瘤山は、ひとつの山の離れ島をなしているわけだ。

かれの終身間者牢は、この自然の地形と、人為の柵内とに局限さ
れている上に、また、ここと麓ふもとの間には、三カ所の山関があつて、
たえず詰つめやく役の山番がいるから、どうしたつて遁のがれだすことはで
きない。そしてその山見廻りは、麻植おえ、板野いたのの里あたりの原土はらしが
交代で詰めることになっている。

甲賀世阿弥。

今——このつるぎ山の奥に、めつたにない人語を聞いたので、吾を忘れて、瘤山の柵ぎわまで駈け下りたが、別に、なんぞこれという目的があつたのではない。ただ、その人影へ本能的に引きよせられたまでのこと。

ちようど身の丈たけぐらいな這松はいまつやつつじが、うまく体を蔽おほい隠したので、そのままジツと、柵の外を眺めていると、さつき俱利伽羅坂からざかの上にみえた二人が、依然と、はばかりない高声で話しながら、すぐ流れの向うへまできて、俎板岩まないたいわの端へ腰を下ろした。

「啓之助、啓之助」

まるで、家来でも呼びつけるように、またそこでこういったのは、蜂須賀家の永居ながいそうろう候、竹屋三位卿であつた。

「諦めてやろう。それほどまでに頼むなら——」

「お、では、つるぎ山踏破のこと、お見合せ下さいますか」

と初めて、ホツとしたらしく答えたのは、阿波守、三位卿などとともに、昨年大阪表の安治川から、まんじまる丸でこの阿波の国元へ帰っている森啓之助なのである。

あの時、森啓之助は、わきぶね脇船の底に一個の長持を積んで阿波へ帰った筈だ。その長持の中には、たしかに、かわちよう川長よねのお米が隠してあった筈——。

さすれば、あの多病薄命なお米も、今はこの阿波の国の人となつてゐる筈だが、啓之助は、そのお米の身をどう始末してしまつたのか、人には、おくびにもそれを洩らしたことがない。

と——一緒に、あの時、かれは太守阿波守からいつつけられて、このつるぎ山の間者牢へ、俵一八郎と妹のお鈴を護送してきている。一八郎は、今なお、世阿弥のいる瘤山こぶよりまだ奥深い、一ノ森の山牢へ封じこめてあるが、妹のお鈴は、この冬の寒気に凍え死んでいた。

で、啓之助は、以来、お船手方ふなてがたの役目をかねつつ、時々、このつるぎ山の目付役を仰せつかつて、月に一度ずつは、必ず山牢の様子を巡察じゆんさつすることになつていた。

きょうも、実は、かれは山目付やまめつけ巡察の役目できていたのだが、そろそろ春めいてきたところから、食客の若公卿わかかくげ、家中のもてあまし者、竹屋三位卿が、なんでも同行するというので、はるばる、

徳島の城下から、山支度と狩装束かりしようぞくできたのはいいが、日置へきりゆ流自慢うじまんの竹屋卿の弓も、二、三日の小鳥追いに、あまり大した獲物えものがなかつたので、すぐに飽きてしまった。

飽きたら先に徳島城へ帰るかど、啓之助が放ほうつておくと、こんどは、まだ絶巔ぜつてんには氷原ひようげんもあろうというのに、蟻ありの小道まとうはで踏破とうはしゆかねば、阿波守への土産話みやげばなしにならぬといいだして、駄々ただだな若公卿の本領を發揮し、さんざんに、啓之助をてこずらせてきたところであつた。

だが、この山牢のある近い所までくると、さすがに、森厳な冷気さんきと山氣さんきがあつて、きようは諦めあきらようと我がを折つたので、啓之助は、はじめてホツと安心した。

で、ご機嫌の変らぬうちに、よろしく下山をすすめようと思つていると、不意に、森々とした空気を破つて、

「山番ツ、山番ツ、山番はいねえか——」

とはるかな上で、絶叫するものがあつた。

「ヤ……?」

啓之助はハツとして、三位卿の顔をみた。三位卿も、木魂こだまにつんざいた今の声に驚いて、俎板岩まないたいわの上へ突つ立つた。

と——また一声。

「山番ツ——」という叫びが、高い木立の奥でしたかと思うと、ほととぎす時鳥のように、それなり後はシーンとしてしまった。

「何かあつたな? ……」

竹屋三位は、星でも占ううらなようにつぶやいた。

「この山に、異変のある筈がございませぬ」

啓之助が否定した。

「イヤ、今の最後の声に鬼き気があつた。誰か人が斬り殺されたぞ」

「それは気のせいでござりましょう」

「啓之助、お前は兵学に通じておらぬから、話せない。人が殺される間際まぎわの五音いんほど明らかなものはないのじゃ。たしかに誰か殺されている。イヤ、誰かではない。今叫んだ声ぬしの主が斬られた:

…」

いいも終らぬ時だった。

真上の細道から、血まみれになつた山番の下士が二人、バラバラと転び落ちに下りてきた。三位卿の音声学もばかにはできない。啓之助は横顔を打たれたように、

「何事だツ」と、怒鳴つた。

「おツ、お目付」

「ウム、いかが致した？」

「い、一大事です……」と息をかすらせたが、すぐ要領をいった。

「また、あの乱暴者が狂乱して、牢番の佐平の脇差を奪つて斬り殺しました」

「えつ、斬つた？」

と、おうむ返しにせきこむ啓之助の言葉尻を取つて、三位卿は

得意らしく、

「ム、斬つたろう！」と大きくうなずいた。

「で、どうした、彼奴は？」

「佐平の声に驚いて、吾々が駈けつけてみた時は、もう柵を破つ
ている切迫せつぱで」

「ヤ、脱牢したか！」

「すわとばかり、組みつきましたなれど、なにせい、血ちがたな刀たなを持
っている上に、いつものような死物狂い、とても、二人の敵では
なく、みるまにあの柵さくざわ際ぎわから西にし谷だにへ向つて、身を躍らせてし
まいました」

「ば、ばか！」と森啓之助、口くちぎたなく呶どかつ喝かつして、

「破牢して西谷へ飛び下りたのを見届けながら、空しく逃げ降りてくる奴があるか。合図鳴子なるこは何のために備えてあると思うのじや。うろたえ者め！早く鳴子を引いて麓ふもとへ合図をしろ！早く引けッ、鳴子をッ」

「おッ」

と、蹴飛ばされたようにはね上がって、

「そうだった！」と山番の一人、バラバラと彼方あなたの黄櫨はじの木の下へ駈けだした。

ヒラリと、その喬きようぼく木の下枝へ飛びついたかと思うと、猿ましろのようにバサバサと木の葉を散らして攀よじ登った。

登りつめた八分目の梢こずえに、タラリと、一本の藤蔓ふじづるがかかって

いる——、片手で幹に抱きついて、片手をそれへ伸ばした山番の下士が、力いッぱいグンと引くと、電波のような力のうねりが、喬木の梢から梢をへて、谷のあなたの山関へ届いた様子……。

かすかだが、物々しく、グワラグワラツと鳴った合図の音響が返ってくる。

下に立って、仰むいていた啓之助は、それを聞きたしかめて下りようとする上の者を、

「待てッ」と手をあげて制止した。

「待て！　そして、しばらくそこで様子を観望しておれ」

「は！」と、虚空こくうで返辞をする。

「見えるだろう、鞆さやばし橋の木戸が」

「うかがえます——、只今の鳴子合図に、手配の人数が動きだしました」

「ム、鬼淵おにぶちの間道かんどうのほうは？」

「よく見えませぬが……」と樹上の居場所をかえて手をかざしながら——「オオ、駈け向ってゆきました、原土はらしの方が十四、五名」

「鶺鴒ばんたいらの平には？」

「見張が立った様子です」

「よし！」と森啓之助、うなずきを与えた。そして三位卿をかえりみながら、

「もう大丈夫——天魔鬼神でもこの山から踏みだすことはなりません」と笑えみをみせた。

「脱走を企てたのは何者か」

「御存じの、俵一八郎でござります」

「ウム、あれか」

三位卿は、安治川屋敷の雪洞ほんぼりと、阿波守が手に持った、ほたる斬ぎり信国のぶくにの光を想い起こした。

「森様——」とまた、樹上から樹下へ、物見の山番が呼びかけた。
「おう、なんじゃ」と、声に応じて振りあおぐ。

「見つけたらしゆうございます。俵一八郎を、八方から一カ所へ、ワラワラと人数が集まって行きました」

「そうか。手もなく捕えてしまったのであろう。では降りてもよ

ろしい」と命令した。

で、啓之助は、すっかり不安を一掃したらしく、岩の上へ腰を下ろして、三位卿へ話を向けなおした。

「あなた様もご承知でございましょう。鳩使いの天満浪人、倭同心と申した奴で」

「知っている。安治川のお屋敷へ妹を棲すみこませていた者じゃ」
「その妹の鈴も、この剣山に同獄しておりましたが、極寒ごっかんのうち、凍死してしまいました。それ以来、一八郎め、ほとんど、野獣のように荒れ狂って無謀な脱走をくわだてますので、特に、山番二人と牢番一名をつけておきました。またもやこんな騒ぎをしでかしました」

「自暴自棄じぼうじきになつてゐるのだ」

「この分では、ただの山牢では不安心ゆえ、改めて、前神まえがみの森の石子牢いしころうへぶちこんでくれましょう」

「それほど手数のかかる奴なら、なぜひと思いに、首を打つてしまわぬじやろう」

「隠密は斬るな、終身山牢へ入れて鳴門の向うへは返すな、間者を斬ると徳島城たいたへ崇りたをする——というのは、義伝ぎでん様以来、破れぬお家の掟おきてでござります」

「そうそう、大阪表におつた頃、そういう話を阿波殿の口からも聞いたことがある。そのために、十一年余りも、この上の洞窟どうくつに封じ込まれている甲賀世阿弥、あれはまだ存ぞん生しょうでいるのか」

「生きているというのも名ばかり、まるで、うつせみかまゆを脱ぬけた蛾がのように老いさらぼうておりまする」

「道理で、この柵の中から上は陰いんしん森としてゐるな」と、その世阿弥が、流れをへだてた向うの柵ぎわに、ジツと身をかがめているとは知らずに、三位卿、なに気なくふりかえった。

その眼を避けようとして、世阿弥はあわてて身を引つ込めたが、おおいかぶさっていた山やま笹ざさやつつじの葉がガサガサと動いたので、

「や、何者か？」

と三位卿、身を屈して流れのうちから向うを睨んだ。

啓之助もズーと柵かざぎわを見渡したが、格別、異状がないので、

気にかけて、

「山鳥か何ぞでござりましょう」と打ち消すと、

「おお、あんな所に」

「何をお見つけなさりました」

「わしが昨日射た流れ矢の先がチラと見える」

という声を聞いて、隠れていた世阿弥はハツと思つたが、もうなおのこと身を動かすことはできない。

「あれは秘蔵の鷹の石打いしうちじゃ。あとで誰かに流れを越させて、拾つておいてくれるように」

「承知いたしました」と、啓之助が答えるのと一緒に、竹屋三位、不意に、ヤツと叫んで小手をひるがえした。矢羽の先が浮いてい

る木の葉の中へ、小柄こづかを投げて試したのだ。

それでも、何のそよぎもしないので、かれは初めて心をゆるしたが、小柄を打ったはずみに、己おのれのふところから金欄皮きんらんがわの料紙入れが落ちて、ズズズと岩の間へすべりこんだのを知らずにいた。俱利伽羅坂くりからざかの方から、にわかには、殺気だった人声がしてくる――

精悍せいかんな装いをした阿波の原士はらしの十数人、一人の武士の両腕をねじとつて、無二無三に引きずり上げてきた。それは脱走をもくろんで捕われてきた俵一八郎。見違えるほど痩せ細つて、頬骨ほおほねは尖りとが、目は青隈あおくまをとつたよう、眉間みけんにも血、腕にも血、足にも血……。ふた目とみられぬ姿である。

「お、来たか」と森啓之助、バラバラとそれを迎えながら、

「いく度となく山を騒がす憎ツくい奴、こんどは前神の石子牢いしころうへぶちこんで、身動きのならぬように致しておけ」

「石子牢？ 合点です！」と、あけび蔓づるを輪にして提さげていた一人の原土、流れへ寄つてザブザブとそれを濡らし、ピューツと手でしごいて紐ひものように柔らかくしたのを、「それツ」と向うへ投げやった。

歯がみをしながら俵一八郎、見るまに、あけび巻きにされてしまった。その水気が乾くに従い、蔓づるは針金より固くなつて、一分ぶ一分肉へ食いこんでいく一種の呪縛じゆばくだ。

柵の向うでは、甲賀世阿弥が、息を殺してこの無残さを眺めて

いた。かれの太股にも鋭い小柄が立っていた。——だが、今はそれを抜くだけの微動もゆるされない。世阿弥は、流れる血さえない傷口をおさえ、ジツとこらえつめていた。

阿波の国だけにあつた特殊な武家階級、原士はらしという一族の中には、その頃までも、殺伐な野武士の血が多分に遺伝されていた。

蜂須賀家の家来であつて、家来の束縛そくばくはうけていないし、無む禄ろくの浪士に似て浪士でもない。いわば、山野へ放ち飼いにされていた客分である。

領主の田数帳たかずちようにある以外の山地は、どこでも、かれらの自由所領とされていた。だから、かれらは決して城下に屋敷をもつて

いない。みな、阿讚山脈あざんさんみやくの根から、四国三郎の流れに沿った奥深くに、土俗風な門戸を構えている。

その中には戦国以来の旧家もあり、天草の残党だという家もある。山を伐り拓きひらいて吉野川へ流す材木や、南国的な花の咲く長順煙草じゆんたばいしなどは、かれらの所領を富ますものであった。それでいて、皆ひとかどの武術に長たけ、スワ城下に喧嘩でもあるとかいって、猛然と、かれらの群が、吉野川の流域を下る時は、ほうふつとして古の野武士だ。

その、気の荒い原士たちは、なんらの仮借かしゃくなく俵一八郎を引ツ立てて、前神の石子牢へぶちこんでしまった。石子牢いしじょうというのは、一種の風穴かざあなで、穴の奥から冷たい風が吹いてくる上に、あ

たりの断崖からは、夜も昼も、たえずザラザラと小石の降る音がしている。

一八郎をその中へほうり入れると穴の口へは、大石や小石をかこつてほんの食物を投げ込まれるだけの余地を残した。これよし、と森啓之助は、竹屋三位卿を促うながして、その日は麓ふもとへ下りてしまふ。

翌日から、山はまた終日シンと静まり返っていた。石子牢に狂う一八郎の叫びも聞えなくなった。

一日ごとに、太陽の熱度が昂たかくなつて、木や草ばかりがズンズンと伸びていった。静中の動、なんらかの力がそこに鬱うっしている。

だが——山は静かだ。

鬼気をひそめて静かである。

ところが、ここに不思議な現象が起こりだした。といつても、世間の巷ちまたとは違うから、そう大した異変ではないが、この山としては少なくともひとつの変った現象には相違ない。

それは何かというと、あれ以来、世阿弥の様子がにわかいきいに生々いきとしてきたことだ。かれは、竹屋三位の小柄こづかが自分の太股こぶせに深く突き刺さったにもかかわらず、山牢の前へ這い戻つて、ニヤリと、十一年目といつてもいい独りひと笑えみを洩ひらしたのである。

「初めて知つた……。ウーム、この山には、自分の他ほかに、まだ一人の同志がいる……。何といつたつけ、オオ俵一八郎、俵一八郎、かれはたしかに大阪表の天満組同心だ。あの様子では、ごく近

ごろに、この山牢へ送りこまれてきたらしいから、さだめし、その後の消息に通じているだろう。なんとかして、あの一八郎と一度話をしてみたいものだ」

こういう希望が燃えだしたのである。希望は生命いのちの火のようなものだ。希望のうすれる時には人は老い、希望の赫々かつかくとする時には人は若やいでくる。

世阿弥は小柄こづかの傷を癒いやすために毎日、薬草の葉をムシつては、青い草汁を傷口へなすりこんだ、そして柵さくから脱けうる方法と場所所に苦しんでいた。

ひどく山の荒れた晩があつた。翌朝みると、一本の山栗の大木が、柵をくずして仆つれていた。山番の者がそれを繕つくろいにこないう

ちに、かれはその朽木くちぎを引き入れて、草むらの中に隠しておいた。春の夜も、山荒れのあと二、三日は、冬のような月の冴さえ方をしていた。世阿弥は真夜中ごろになって、獣けもののように、間者牢から這いだした。

かれは、青白い月つきしろ魄をあびて、鬼のように働いた。やがて柵に攀よじて外へすべ迂り出したかと思うと、世阿弥は、隠しておいた朽木を激流の岩に架かけて、飛沫しぶきのかかる丸木の上を這って渡った。

「俵殿、俵殿……」

やっと尋ねあてた石子牢のぞてを覗いて、こう呼んだのは世阿弥である。パラパラパラ崖がけから小石が降っている。その断壁面だんぺきめんの

荒い岩肌に、藤の森から青い月がさしていた。

「一八郎殿……」と、もう一度、石と石との間をかき分けて、世阿弥が声をかけるとややあつて、

「うウ……、た、たれだ！」

と風穴の中で物音がした。——物音はしたが、一八郎もこの深夜に訪れたものを深く怪しんだとみえて、めつたに穴口へ顔を寄せてこない。

「俵一八郎殿……。わしは甲賀世阿弥と申すものでござる。阿波の者ではござらぬ。十一年以前からこの山牢に封じこまれている世阿弥と申す幕府の隠密でござる」

「やッ、世阿弥殿？」

「ご承知か」

「知っている！」と、一八郎、青白い顔を石の間からさし出した。世阿弥は、妖鬼に睨まれるような凄さをおぼえた。

「ウーム、なるほど。いかにも世阿弥殿であった。たしかにそこもがこのつるぎ山にいるとは存じていたが、どうしても会うことができない。それゆえ、わざと、柵を破つて山を騒がせ、そこもとの気がつくように致していたが……ああ、とうとうお気づき召されたか」

「や、では脱走する目的ではなくて？」

「なんで。——この山さんきよう峽きやうを脱走したとて、四面は山と海との

二十七関、とても逃げおおせぬことは某それがしも心得ている」

「うむ、仰せの通りじや。土佐境とさぎかいも讃岐越さぬきこえも逃げ道はない」

「しかし、お目にかかればもう本望でござる。世阿弥殿、一言ひとことお告げいたしたいことがある」

「オオ！」と顔を寄せあうと、二人の間へ、ザア——と箕みを開けあたような砂礫されきが落ちてきた。それをかき落して、また穴口を作りながら、甲賀世阿弥。

「わしも、お身に会ったなら、何ぞ消しょうそく息そくが聞かれようかと、それ一念で、山牢の柵を破つてまいったのじや。して、わしに告げたいことは」

「江戸表におらるるそこもとの御息女お千絵殿という方から便りをもって、唐草銀五郎からくさぎんごろうというものが、阿波へ入りこむべく大阪

表までまいりました」

「才、さては、唐草が娘の消息をもつて阿波へまいりますとな
？」

「さ、ところがその銀五郎は、目的の途中で、あえない最期をと
げたのでござる。場所は、大津の禪定寺ぜんじょうじ。——某もまたそのそれがし
時に、阿波の侍のために捕われて、とうとうここへ送られてまい
った。しかし、御落胆なさるな、まだ安治川屋敷に押しこまれて
いる当時、手前の妹の鈴が探ったところによると、われらと同腹
の者で天満組の目明しをしている万吉と申す者が、法月弦之丞と
いう人じんの力を借りて、再度、阿波へまいる支度のために、お千絵
殿を尋ねて行ったということでもござります……」

「はて？ ……法月弦之丞と申せば、わしが江戸表にいた当時は、まだ十四、五の美少年で、夕せきうんりゆう雲流の塾へ通っていた大おおばんぐみ番組の子息——。どうしてそれが、娘の千絵を存じているのであるう」

「二人は恋の仲だそうでござる」

世阿弥は不思議な気がした。かれが、夢にみるお千絵は、いつも彼が江戸を去った時のおさないお千絵であったから……。

「なるほど、もうそんなこともありそうな年頃。では、ついでもって伺うが、その千絵女のほかに、お綱と申すものの消息をお知りなさるまいか」

「お綱？ ……それはまた何者でござりますな」

「実を申すと、母違いの娘でござるが」

「ひと頃、大阪表を立ち廻っていた、女スリの見返りお綱という者はござったが？ ……」

「いや、それは全く別人じゃ」

「無論、そのお綱ではござりますまい。だが、ほかにはお綱というような名は、誰の口からも聞いたことがなかった……」

「ないのが当然でござろう、親子しんしじょうの情、お笑い下さい」

「しかし世阿弥殿。ただ今お告げした通り、弦之丞殿が江戸へつあかつきいた暁には、さだめし、それらの消息や、また公儀の旨をふくんで、いつかは一度、この山牢へも訪れるものと察しられる。必ずともそれを信じて、気を落さぬように」

「十一年ぶりで、初めてその吉報を聞きますわい。そうあればお

手前もなおのこと、御短気をなされずに、阿波の密謀が公おおやけとなつて、幕府よりお救いのある日をお待ちなさるがよい」

「ところが……」と、一八郎は暗然として、

それがし「某の命は旦たん夕せきに迫つています。それで……」

といいかけるうちに、もう彼の面おもてには、ありありとした死相がうかんでいた。

そこへ山番のしわぶきがきこえてきたので、世阿弥は、一八郎のいった意味を「なぜか？」と問い返してみる隙もなく、石子牢の前を離れて駈けだした。

森をぬけて断崖に出で、藤蔓ふじづるにすがりながら瘤山こぶやまの裾すそへ戻

つてきた。そして、朽木丸太を架^かけておいた所へ出るまで、流れぎわの岩石と水草の間を這^はつてくると、何やら、妙なものがフト指先にふれた。

さわつたと思うと、それが岩の間へ、スルリと這^{すべ}つて行つたので、あわてて拾い取つてみると、月明りでしかとは分らないが、どうやら古風な懷紙^{かいしばさ}挟^さみで、金欄^{きんらん}革^{がわ}の二つ折り、旅用とみえて懷紙以外なものが厚ぼつたく挟^さんである。

「分つた、これはあの竹屋三位が持ちものであろう」

世阿弥は、格別役にたつものとは思わなかつたが、そのまま、ふところへ入れて、以前の所から激流を渡つた。

そして、後に疑いを残さぬように、朽木を流れの中へ突き落す

と、パツと白い水煙をあげて、その丸木が大蛇おろちのように浮かんでゆく。

で、無論、世阿弥が柵さくを出て、石子牢いにいる一八郎と話をまじえたなどということは、山詰づめの役人、誰一人として気がつかなかったが、永らく蟄ちつぷく伏ふくしていた世阿弥の心は、その日から、俄然と眼をさまして一縷るの望みを江戸の空へつないだ。

「わしがここにいるということは、まだ世の中から忘れられていなかった。今に！ 今に！ 誰かくるに違いない」

こういう信念をもったのである。

「しかし？ ……」と冷静になつてみる時に、世阿弥は、それもまた、あまりにはかない凡ほんじょう情じょうにすぎないのではないかと疑つ

た。

単なる人恋しきから燃える希望ではないかと反省した。

幾多の危険を冒して、ここへ訪ねてきた者に、この姿を彼に見せ、彼の姿を自分が見たところで、果たして何の意義があらう。やはり、それも一つの夢想に過ぎない。一時の煩惱ほんのうを、よろこばせ、涙ぐませるだけのことではないか。

——とも思うし、いやいや、そうではないとも思いなおした。この厳しい密領へ、命がけで忍んでくる者があれば、それは、必ずや大きな意義をもたらすものか、求めに来る者でなければならぬ。

宝曆変以来、密雲につつまれているこの国の内秘。その謎をと

き、その秘密の鍵かぎを握っているのは自分だ。

法月弦之丞とやらいう者、また、天満組の万吉とやらいう者が、ここへ来る日があると、俵一八郎がいったのは、そうだ！ その鍵を自分へ求めに来るのに相違ない。

永い山牢生活に、自分はあまり愚に返っていた。ただいたずらに、江戸へ残してきた二人の娘の愛情にばかり囚とらわれていた。

本来、自分がこの阿波へ入り、こうした運命を招いた時の使命はなんだったか！ 鳴門の渦うずと剣山の雲おおに蔽おほわれていた徳島城の大秘密をあばいて、天下をアツといわせようという壮そうと図とに燃えていたのではないか。

老いたものだ。甲賀世阿弥も、いつのまにか焼やきが廻まわった。そ

の頃の元気を思うと恥かしい。

そうだ。支度をしておこう！

いつ何なんぴと人がこの山を訪れても、すぐに、自分の探っておいた

限りの言葉を、その者へ、手渡すことができるように。——よしや、それが無駄になるまでも。

かれの思慮は、ここへ、ピッタリと落ちついた。

死しにばな花だ！ 死花だ！ と彼の心は躍ってくる。徳島城内のか

ずかずの密謀や、歴々と、阿波一国にみなぎっている反徳川の風潮を、十分に探っていないながら、この終身牢に枯死こししてしまう運命であつたものが、誰かの手で、江戸城へ届けられるとすれば、その甲賀世阿弥に死花が咲くわけである。

虫のごとき死をまぬがれて、人間らしい死を遂げることができ
る。

で、世阿弥はその支度をしようとした。

しかし、ひるがえつてみると、この山牢の中に、悠々と、そう
いう記録などを書き残しておく、筆^{ひつぽく}墨などはない筈である。

「はて? ……」と、その方策に腕をこまぬいた時、かれは、岩
の間から拾ってきた、竹屋三位^みの懐紙入れを思いうかべて、中を
開いてみる気になった。

別にこれぞという物もなかったが、その懐紙^{かいしばき}挟みの中に、一
帖^{じょう}の絵図がしのばせてあった。

こがた ほうじょう
 小形な 法帖 みたいに折り畳んであるので、サラリと押し開いてみると、竹屋卿がわらじがけで実地を写したものらしく、徳島城の要害から、撫養むや、土佐泊どまり、鳴門のあたりを雑に書きかけてある海図だった。

だが、世阿弥の目には、それが書き半端はんぱな海図とのみ単純には看過されなかつたとみえて、

「お、これは、軍船の配りや布陣の線を引いたものじゃ。や、鏡かがみじま 島の袋漣ふくろがた——鳴門の裏海には、いつのまにか、こんなにも多数の軍船がひそめてあつたか」

と、図面の角点を数えて目をみはつた。

「よいものが手に入った。これも、一つの証拠にはなる。しかも、

公卿方の者が自写したのは、何より有力な証拠品である。ウム、
そうだ、これへ自分が隠密して探り得た箇条を書き加えて……」
ひとりうなずいた甲賀世阿弥は、ふすまに使っている鹿の毛皮
をとりだし、また、瘤山こぶやまの窪みくぼみへ下りて、手ごろな篠しのを切つて
きた。で、何をするのかと思うと、この間、太股へうけた一本の
小柄こづかを細工刀さいくがたなとして、斑竹ふちくの細い尖さきを切り落し、鹿皮しかがわのワキ
毛をむしつて、一本の細筆ほそふでを作ったのである。

さて、筆はできたが、墨汁を何から得よう。

かれはまた、草木の中を歩いて、紫、藍あゐ、紅べに、さまざまな花を
もんで試みたが、どれも日光にあえば色を失うのみか、筆にかか
る粘ねんりよく力がない。

その中でも、割合に色素のありそうな、ぎらん草の花を選んで
 洞ほらへ帰った。そして紫色の汁を絞り、指を噛んで、自分の血汐を
 タラタラとそれへ注そそぎませた。

岩を机とし、獣油を灯ともし、かれは、さながら大蔵だいぞうきよう経を写し
 にかかる行者のごとく、端然と洞ほら穴あなにこもつて、自分の血とぎ
 らん草の汁へ筆をぬらしはじめた。

そして、竹屋三位が鳴門水陣の線を引きかけてある、あの折おりち
 帖ようの余白へ、きわめて細い字で、ポトリと五、六字書いた。

書けた文字をジツとみつめていると、血と紫むらさき花きはなの汁がうま
 く混和して、墨よりも強い、玉虫色の光沢をおびてくる。

「これでいい」

と、世阿弥は額ひたいを抑えた。

遅々とした筆が運ばれだす。

灯ともしがつきれば獣油を足し、筆が渴かわけば指の血を絞しぼって……。

だが、筆にふくませる血液も、やがて、指からはしたたらく
なつて、かれは、五体のいたる所を小柄で破つた。

*

*

*

煙草船たばこぶねや藍玉船あいだまぶねが、白い帆を張つて、ゆるゆると吉野川を
迂すべつてゆく。

その底には、もう若鮎わかあゆがチラチラ光っているだろう。南国ら
しい黄花こうかの畑、変化に富んだ兩岸の風景もかくべつだが、何より
はその大河の、砂と水のきれいなことといったらない。

きれいなといえ、水も水だが、アレをござらん、あのかんこ船に乗つて、こつちへ上つてくる御新造様は、いづれ御城下のお方だろうが、なんというお美しいことだろう——と、藍取歌を唄つていた陸の娘が見とれていた。なるほど、この山水の紅一点。今——西麻植の岸へ船をつけて、スラリと、そこへ下りた美人がある。

阿波にはたくさんに美人がいるが、あの豊麗な、肉感的な、南国色の娘たちとは、これはまた、クツキリと趣をかえた美人。太夫鹿の子の腰帯に、裾を上げて花結びにタラリと垂れ、柳に衣裳をかけたようななやかさは、東風にもたえまいと思われるほど、細ツそりとした形である。

「宅助や……」と、うしろを向いて、

「うつとうしいから、お前、これを持っていておくれでないか」
べにお 紅緒の すげがさ 菅笠を げろう 下郎に渡すと、うけたお供の ちゆうげん 仲間げんは、それを自分の笠に重ねて、

「へい。もうお近うございますよ」

と、南の空をふり仰いだ。

剣山がそびえている。

「ここから、もう何里ぐらい歩いたらいいの」

「さア、私もこんな奥へ来たのは初めてで、よく見当はつきませ

んが、かわしまごう 川島郷から ゆだちふなど 湯立船戸、ザツと四、五里も歩いたら、あなふ 穴

きぐち 吹口へ着きましようか」

「そこが、あの山の麓ふもとかね？ ……。まだずいぶんあるらしいが、どこかに駕屋かごやでもないかしら」

「へへへへ、お米様よね。いつまで大阪表にいる気じゃ困りますぜ。ここは阿波の国も吉野川のグンと奥、そんな物があつて堪るものじゃございません」

くいつめ者もの

仲ちゆうげん間げんづれの旅の女は、静かな大河に沿った道を、上かみへとつて歩きだした。

豆の花が飛ぶかとはかりに、たくさんな蝶が舞っている。群蝶

にくるまれて行くうしろ姿が、目を吸われるほど美しい。

「そんなことをいうけれど、お前……」

仲間風情ふうせいへ話しかけるには、もつたいない笑えくぼをみせて、

「立派な乗物はないだろうが、山やま駕かごとかいうものぐらいはあるだろうに」

「そりや、ない訳わけはございますまい。第一、馬ならたしかにお間に合せ致します」

「人をばかにおしでない」

ちよつと睨にらむまねをして、

「在所のお嫁さんじゃあるまいし、誰が、馬へのるなんていったえ」

「お怒りなすつちやいけません。だから、乗物はないと、まっすぐに申しあげているんで」

「お前は私をなぶるから嫌いさ」

「エエ、どうせ嫌いは分っております。なにしろ大阪表にいた頃から、この宅助たくすけは、仇役かたきやくにばかり廻っておりますだからね」

「ずいぶん私をひどい目に会わせました」

「またお怨みうらみでござんすかい」

「一生忘れやしませんとも」

「じよ、じようだんじやねえ！」

と仲間の宅助、下司げすらしく頭を搔いて、

「そのお怨みはお門かどちが違いでござんしよう。ねえ、主人持ちのか

なしきに、わっしはただ、いいつけられたことを真ツ正直に承るだけのこツてすぜ。命がけで安治川の渡船場から、お前様を引ツさらつてきたり、長持の底へ入れて綱つなぐら倉の番人をしたり、ずいぶん口クでもねえことはやりましたが、その揚句に、思いを遂げて、うまい花の汁を吸つたのは、すなわち、手前のご主人様——怨むなら、その森啓之助様をお怨みなさいまし」

「知らないよ……」

「そう、早くお歩きなさいますと、またすぐに息が喘きれますぜ」

「——お前も怨むし、啓之助様も私は怨む……。ああ、こんな国のこんな山郷やまごを歩こうとは思わなかつた」

「いけねえいけねえ。そういう溜ためいき息がでた後は、いつでもきま

つてお体が悪くなる。気をかえて、雲雀ひばりの声でもお聞きなせえ」

「思い出すと腹が立つもの……」

「まあよろしいじやござんせんか。これが、大江山へでもさらわ
れて、酒顛童子しゅてんどうじのようなやつを亭主にしたというのなら、そり

や諦めあきらもつきますまいが、城下端はすれの小粋な察へ納まつて、お化
粧しょうり料もタツプリなら、遊山ゆうざんやぜいたくもしたい 三昧さんまい、森啓

之助様の思われもので、お米の方様というお身分は、決して悪い
仕合せじやございませんぜ」

この仲ちゆうげん間の粘り舌ねばが、少ししつこくなってきたので、傷つ

きやすい旅の心は、急に女を憂鬱にさせた。

もう、いわずもがなのことだが、この瘦形やせがたの美人こそ、去年

の秋まで、大阪の立慶河岸りっけいがしにいた川長かわちようの娘お米よねであつた。

連れているのは啓之助の仲間、お米を阿波へ運ぶ時に、骨を折つた宅助である。二人の口ぶりから察するに、お米はその後、心ならずも、啓之助の意に従わねばならぬ、余儀ない境遇に落ちてゐるらしい。

だが、その心の奥底には、当然、まだ啓之助の腕では、ねじ伏せきれないものがあるだろう。

それが二人の会話にチラチラ出る。弱い女の不平と反抗だ。けれど形の上では、もう誰が目にも、お米は啓之助の困かこい女もの、宅助はその番人という態ていになつてゐるのを否めない。

ただ、幾分か、お米にとってよろこぶべきことは、あの癆咳ろうがい

の病のかげが、大阪にいた頃より大層よくなっていることだった。
瞼まぶたのあたりの青いかげや、病的であつた頬にくつやの肉艶、それがズツ
と健康らしく見えてきた。

環境が變つたからであらう。

お米の囲われている寮のあり所が、海かい氣きと松風に恵まれている
地に相違ない。

黙つて歩くと道が遠い。

何の用向きをもつてきたのか、指して行く劍山ふもとの麓もとまでは、ま
だなかなか道のりがありそうだ。

「こいつはいけねえ、とうとうこじれやすいお米をこじらしてし
まった」と、仲間の宅助が後からテクテク供をしながら、少しし

やべりすぎたかなと後悔した。そして、何とかひとつご機嫌をとり結ばなくつちや……と思つてしていると、

「おうい——」と、突然。

うしろのほうから遠呼びに手を振ってくる男がある。

「おーい」とまた一度呼びとめて、こつちへ急いでくる者をふりかえると、顔は見えない、一文字の笠、ヒラヒラするのは縞合しまがっ羽ばだ。

「誰だろう。こんな所で呼ばれる者はない筈だが……」お米が少し気味悪げに道をよけていると、程もあらず、そこへ追いついてきた一文字笠の男は、

「もし、川長のお米さん」

と、いきなり、ずほし 凶星をさして、かつば 合羽の片袖をうしろへはねた。

帯の間の手拭をぬき取り、口をゆが歪めながら、生え際ぎわの汗を拭いている顔をのぞ覗いたが、お米にも宅助にも、どうも覚えのない男だ。

「私をご存じのようだけれど……お前さんは？」

「お忘れでございますか」

「さア……どうも」

「去年の夏の初め頃は、立慶河岸へ屋根舟をつけて、よくお前さんの家の、川魚料理を食べに行つたものですね」

「ああ、それじゃ店のお馴染なじみでございましたか」

「なアに、馴染みというほどでもねえが、お十夜孫兵衛という男

と、飲み仲間によく一座したことがある」

「それを聞いて思い出しました。ではあなたは住吉村にいた……」

「そうよ、あの頃ぬきや屋敷に住んでいた甲比丹かびたんの三次という者だ」

「まあ、人というものは思いがけない所で逢うものでございますね」

「冗談をいいなさんな、読よみほん本の筋じゃあるめえし、こんな四国の山奥で、バツタリ行き逢つたり何かして堪めえるものか。実はお前めえの尋ねてゆく人に俺も少し用があつて、この通りの汗だくで追いついてきたのよ」

「私の尋ねてゆく人つて？ ……」

「トボけちやいけませんや、お前めえさんの旦那様だ」

お米はほろ苦い顔をした。

仔細をきくと、甲比丹の三次は、去年以来、禁制の密貿易をやるぬきやの仲間とちりぢりばらばらになって、諸方の港場を流れていたが、うまい仕事も見つからないので、これから尋ねてゆく森啓之助に、身の振り方をつけて貰うのだといった。

「なんだい、この虫ケラは？」

と側そばにきいていた宅助は、その虫のいい言い草と、三次の凶太い面構えにあきれている。

お米とすれば、もと大阪の店へ来つけた客ではあり、啓之助とこの男と、どんな関係があるかないかも知らないので、話に釣ら

れながら、肩を並べて歩きだすよりほかなかつた。

「ふぎけた野郎だ」

虫の納まらない仲間の宅助、後から来て先へ立った甲比丹の三
次へ、突ツかけるように、

「おい！」と声をかけた。

「なんでえ！」語気が同じに弾はずんでくる。

「どこへ行くんだ、てめえは一体」

「今もいったとおりに、森様へ用向きがあるんだ。城下のお屋敷を
たずねたところが留守、じゃテツキリと思つて、お米さんの妾宅
へ行つたところが、そこも留守だ。で、だんだん探つたところが、
吉野川を舟でお前めえたちが上つたということが知れたから、やツと

こうして道づれになれたてえものよ」

「だが、ちよツと待ちねえ。うちの旦那は、お前のめえのような者たあ知合いがねえ筈だぜ」

「向うで知らなくつても、こちらさまはよくご存じの者だからしかたがねえ」

「しかたがねえという法があるものか。どこの馬の骨だか牛の骨だか分らぬ者に、なんで旦那が逢うものか、はるばる行つてみるだけ無駄骨だ」

「ご親切はありがてえが、よけいなことはいつて貰もらうめえ」
「なにを」

「およしツ——宅助」お米はあわてて目で止めた。この人ひと気けのな

い山郷やまごで、間違まちがいでもあられた日には、女はどうする術すべもない。殊ことに、隼はやぶさのような三次のまなざしを見ただけでも、そんな手軽てがるいコケ脅おどしに怖おじて、後へ引つ返すような生なまやさしい食くいつめ者ものでないことは分り過ぎている。

それよりは、一刻も早く、啓之助や原士はらしたちのいる剣山の麓ふもとへ辿たどりつくことを急いそいだ方がよいと、お米は息いきぎれをこらえつづけた。

つるぎ山の麓ふもと口に、原始的な一部落がある。巨大な石材や自じねん然ぼく木の柵さくに囲かこまれている建物は、原士の詰つめめている山番所やまばんじょ、その向むかうに目付屋敷めつけが見えた。その附近に散在さんざんしているのは、つる

ぎ山を見廻るこもの小者小屋や、土佐境とさぎかいの関所へ交代してゆく山役人の溜りたまなどである。

陣屋門みたいなその出入り口へ、今、足を引きずって来たのはお米と仲ちゆうげん間の宅助で、もうこの辺へ来て四方を仰ぐと、綱つななつきなつきさん付山、赤帽子岳あかぼうしだけ、丸笹まるざさの峰などが、白雲の上に巨影をみせているので、まったく、山奥へ来たという感じが深い。

「もうここまで来れば、日が暮れようと、雨が降ろうと、安心なものでございます。どれ、とにかく、取次を頼んでみましょう」と、宅助がつかつか門もんぎわ際へ寄ってゆくと、前後してきた甲比かひ丹たんの三次が、もうそこにいた組子の者に、腰をかがめて何かしゃべっている。すると、

「さようか、では、しばらくそこに待っておれ」

と一人の小者が奥の目付屋敷へ入って行った様子。三次は、なれなれしく門小屋の土間どまろへしやがみこんで、煙草たばこ入れをとりだしていた。

「恐れ入りますが、ちよつと、お願い申します」

こんどは宅助が揉もみ手をして行って、

「御城下からお出張でばりになつてゐる、森啓之助様へお目にかかりたい者でござります。どうぞお取次を願います」

「その森啓之助様なら、只今、同役が知らせに行つたよ。しばらく待つておいでなさい」

「いえ」宅助は、わざと三次へ目もくれないで、

「そこにいる者とは違います。手前は、啓之助様の召使なので、へい」

「ああ、同行してきた者ではないのか」といつているうちに、奥の目付屋敷の方から、森啓之助の姿がこつちへ向いて歩いてきた。「誰じゃ、この方にほう密用みつようがあると申してまいった者は？」と啓之助、そこへ来て見廻すと一緒に、すぐと、門のかげにチラと見えたとお米の姿に気づいたが、わざとそれを後廻しにして、くみこ組子にたずねた。

「ええ、啓之助様、その甲比丹かびたんの三次はここにあります。どうもまことにお久しぶりです」

「はて、そちは？ ……いつこう覚えがないように思うが」

「こんな山の中だから、思いだせないのございましょう。あなたもお船手組ふなてぐみの森様、わつしも密貿易船ぬきやぶねの三次です。お互に水の上で顔を合せりや、ああ、あの時のあの野郎かと……」

「うむ、わかった、あの三次か」

「折り入って、お願いがあつてまいりやした。誰か、美しいお客様もあるところ、長いお邪魔はいたしませんか、ちよつと、しばらくお顔を貸していただきてえと存じますが」

啓之助は、下らぬ者を取り次いだ、組子くみこの愚鈍を腹立たしく思つたが、何となく、脇の下へもたれこんでくるような三次の口ぶりを、強くはね返してもまずいかと考しつむじよえたらしく、

「そうか、では目付屋敷の、執務所しつむじよの縁がわへ行つて控えてい

るがいい。何の用事かしらぬが、後からまいってきいてやる」
「ありがとうございます。やれやれ、これでわつしもホツと致しやした。何だツて、この山奥まで尋ねてきて、面会は相ならんななどと、木戸を突かれた日にや御難ですからネ」

脱いだ合羽を片腕に垂らして、お米のほうへ目をくれながら、
自然石じねんせきの石段のぼを上つて、向うの役宅の庭へ廻つて行つた。

と、啓之助は、それを待ちかねて、すぐに門の外へ出た。そして、サツサと向うの樹蔭こかげへ行つてから、お米を目でさし招いた。
「どうしたというのだ、お前は？ 勝手に出歩いてはならぬというのに、このような役向きの所へ何しにきた。また、連れてくる宅助も宅助じゃ」

こう咎^{とが}めたが、啓之助の挙^{きよ}動^{どう}は、むしろ、お米が不意に来たよろこびに、落ちつかないほどなのである。

誰にも内緒にしている匿^{かく}し女が、役向きの出先へ不意にやって来たので、啓之助は、こそぐツたいよろこびと舌打ちしたいような困惑を感じた。

目付屋敷には、まだ竹屋三位がいるので、そこへ曰^{いわ}くのあるお米を連れこむことはできないし、逢^{あひ}曳^{びき}のように外^{がい}聞^{ぶん}にかかわる。話しているのは、なおさら

で、自分が案内して、附近の家へお米を待たせておき、口を拭いて、目付の執務所へ帰ってきた。

啓之助が使用している机の側から、煙草盆たばこぼんを煙管きせるの首で引ツかけて、その縁側に腰をすえこんでいた甲比丹かびたんの三次。顔をみると狎なれツこい態度で、

「ああいう美女たぼをこの山奥まで逢いに来させるなんて、旦那も、なかなか罪つくりでございますね」と、啓之助にとっては、すこぶる不愉快なお追ついで従しやう笑しやういをした。

「そんなことはどうでもいいが、三次とやら」

「やはござんすまい……ご存じの仲で」

「揚げ足をとるな。多用な役宅のことじゃによつて、用向きの次第、簡単に承ろう」

「簡単にね、結構でございます。じゃ手ツ取り早く申しますが、

森様、まことにご迷惑じゃございませうが、ひとつ、わっしをお船手ふなてか何かでお使いなすつて下さいませんか」

「では、何か、貴様は雇われ口やとを求めにまいったのか」

「至る所を食い詰めましてね、もうこの阿波よりほかにや、のんきに暮らせそうな所はねえんで」

「それは断ることわ。殊に、お船手の水夫かこも、今では他国者たこくものをお召抱えにはなるまい」

「じゃ、それはよろしゅうございます。断られて引つ込むことに致しやす——。その代りにですね、森様、たんとじゃございません、千両といいてえが、その半分ほど、ご拝借願いたいと思ひますが、どんなものでございませう」

「な、なにをいうのだ」

「お金を貸してくれという話なので」

「そちは正気でないに見えるな。暴言を吐くにも程があるぞ」

「程があると思うから、千両欲しいところを、こつちから五百両と負けて出ているんじゃないやございませんか。安いもんでございます、何とか算段をしておくんなさい。それもサ、何もお前さんの自腹じばらを切つて出せという話じゃねえ、蜂須賀家のお金蔵かねぐらから、威張つて引きだせる筋のものです」

「だまれ！ 蜂須賀家の公金を、たとえ一文でも、貴様のような奴に下さる筋があるうか」

「出ねえものを取ろうとして、無駄骨を折るような三次じゃござ

いません。じゃ、そのところを、チョツピリ耳こすり致しますが、蜂須賀様じゃ、また近頃、だいぶ精を出して、火薬を買い込むつて話じゃございませんか——あの天下御法度の戦薬をね。そりや、何かに要るからでござんしようが、廈門船や西班牙船から長崎沖で密買した火薬を、この阿波の由岐港に荷揚げをしてコツソリと、渭の津の山へ運びこむつてえ噂が、もっぱら評判でございますよ、といつても、色をかえて、びつくりすることはございけません。その評判は海の上のことで、まだ怖い江戸城の親玉へまでは知れていねえ話ですから」

「……………」無言でいるうちに、啓之助の色が青くなつてきた。この獯猛な男の毒ツ気にあてられたのだ。そして彼は四、五年

前にも、新銳の銃器何千挺ちようを、外船から密輸入した時、その折海の上で働いていた密輸入仲間ぬきやなかまに甲比丹かびたんの三次という名が重きをなしていたことを思いだした。

「もうよけいなおしやべりは止めましょう。わっしも、楽に食えている身分なら、御無心なぞにやまいりませんが、去年、住吉村の巢を荒されちまった後、どうも運の悪いことばかりで、食うや食わずの手下が五、六人も、口を開あいて待つているんです。どうぞ何とかお助けの方法を講じてやっておくんなさい、でないと、わっしは我慢いたしますが、空すき腹ぼらまぎれに乾分こぶんの奴が、御当家のことを、どんなふうふうに世間へ吹ふい聴ちようするかもしれませので」

「これこれ三次、貴様は何か思い違いをしているらしい、そりや

何かの誤聞ごもんであろう」

「冗談じゆたんいっちゃいけません、永年潮風に吹かれています密輸入ぬきやの三次、海の上のことなら迅風耳じんふうじだ！ じゃ、こんどはお前めえさんの手相を一つ見てやろう」と、片あぐらを抱かかえこんだ三次は、テコでも動かぬ面構つらがまえをして、啓之助の顔をジツと見ながら、

「あー、お前めえも少し密輸入ぬきやをやったことがあるな。しかも、そいつア美しい生物で、イヤだと泣くのを手込てごめにして、お関船せきぶねの底へ隠し、他領者を入れちやならぬ御城下へくわえこみながら、殿様の目をかすめているという人相だ……」

と、啓之助をゆすつてしていると、どこからか、ヒユツ——と風を切つてきた矢が、三次の喉笛のどぶえを貫いて、白い矢羽やばねを真ツ赤に染

めた。

白粉おしろいくずれ

ひどく酒の醜はつこう酔においする香においがすると思うと、そこは山役人の食料や調度の物を入れておく納屋らしく、裏の土間に、咽むせるばかりな酒樽さかだるが積んである。

お米よねは、その薄暗い一間まに、いつまでも待たされていた。もとより装飾も何もない部屋なので、夜になることを思うと、急に心細くなった。それに、家の中に蒸むれている酒の気がたまらなく鼻においをついて、香においだけでも酔いそうになった。

それとは反対に、宅助は、冷酒ひやを酌くんで、五、六杯も盗み飲みをした揚句、いつか、裏土間の藁わらの上へ、高たかい 軒びきをかいて居眠いみんつてしまった様子。

重い戸の開あく音がした。啓之助が入ってきたのである。真つ青な顔をして――。

「お米……」

「旦那様ですか」

「ウム、どこにいるのじゃ」

「こちらの部屋でございます」

「あ、そこは、納屋番が夜寝る所じゃ、その廊下の奥がよい」

「どこも同じじゃございせんか。ほんとにひどい旅籠はたごなこと……」

…。ああ、この天井板のない屋根裏を見ていると、大阪表から来た時の、怖こわかつた船底が思いだされます」

「ばかな」

かれも、それをいわれることは、古傷ふるきずにさわられるような気持がすると見えて、舌打ちをしながら、お米の側へ来て坐つた。するとお米は、「あら……」と、後ろへ手をついて、

「血が……あなたの袖に、ま、耳のところへも、なまなましい血が……」と目をみはつた。

いわれた所を撫なで廻まわして、掌てのひらについた色を眺めながら、

「なんでもない」

「どうなすつたのでございます」

「甲比丹の三次の血だよ、わしの身から流れた血ではない」

「え？ ……あの三次を、殺したのでございますか」

「竹屋三位が矢をもって射殺したのだ。あの居候殿は、人を殺すのが好きで困る」と、かれは血におびえた心のうちで、三次の手下どもが、火薬一件や自分とお米のいきさつなどを、世間に流布るふせねばよいかと案じていた。

お米もまた、啓之助の頬へ、ベトリとつぶれた血糊ちのりのかたまりを見て、にわかに、胸がムカムカとしてきた。この国へきてから、しばらく忘れていた血痰けつたんが、胸のどこかに、時機を待つて鬱うつた滞いしているのではないかというような神経を起こしたりした。

「陰気だな、この中は」

「早くお話をして、私は、今日のうちに御城下へ帰ります。こんな所に、一晩夜を明かしてはいられません」

「ばかを申せ、今頃から帰れるものか」

「でも、いたたまれやしませんもの」

「一体、何^な用^{よう}があつてまいつたのだ。こういう山家^{やまが}ということ
を存じながら、来たほうが悪いではないか」

「実は、急に、お願いがありました……」

「また、大阪へやってくれということか」と苦^にツ^がぽい声の下から、
針のような筋が啓之助の眉に立った。

「エエ……」

先にいわれてしまったので、お米はうつむきながら、かすかに、

哀れッぽい声をかすらせた。そして、来る途中で巧みに織たくつてきた作りごとが、グツと喉のどにつかえてしまった。

「何度いおうと、いけないといった以上、ゆるすことはできないのじゃ。もう四、五年もたったらやってくれる、それまでは大阪へ帰ることはならぬ」

「帰るとおっしゃいますけれど、決して、もう、大阪へ行つて、戻らないというのではございません、すぐにまた阿波へ」

「いけないといったら！」

「だって、そ、そんな……」

「くだいッ」

「そんなこと、む、無理でございます」

「ちイツ、くどいというに！」

いきなり啓之助が、お米の頬を打った時、お米は、ワツと泣いて、

「口くちや惜しい、わ、わたしは、こんな所へ手てごめ込に連れてこられた上に、お母つかさんが死んでも家へ帰られない」

涙がこぼれてくると、胸につかえていた空そらごと言までが、苦もな
く、真実そうにスラスラ口へ出てきた。

お米の怨うらみがましい泣き声をきくと、啓之助はまたかというよ
うな舌打ちをして、じゃけんに唇を噛みしめた。

「何をメソメソ泣くのだ！ ものの分らぬにも程がある」

「わ、わからないのは、あなたのほうじゃございませんか」

「やかましい、ここをどこだと思うのだ、男の役目先へまで来て吠え面ほづらをかく奴があるか」

「どこであろうと、私は言いたいことを申します。エエ、弱くしていれば、私なんか、今にあなたのために殺されてしまうかもしれない」

「ウム！ どうしようと、この啓之助の一存だ」

「私だって、なにもこの国へ、島流しにされた科人とがにんではなし、身を売ってきた女でもございませんからね」

お米も負けずに言い返した。

そして、止めどもなく、流れる涙を流れるままに任して、いか

にも憎そうに、啓之助を睨みつけている。

その眼が、以前から怨みつらみの数をならべて、男にものをいうような時、啓之助の気持も妙に荒すさんできて、食いちがっている二人の心と心とが、行く所まで、いがみあわなければ止やまないのが常であつた。

今も、かれはお米の眼色から、深い反抗が自分に燃えてくるのを感じて、

「身を売つてきた女ではない？ フーン、だから、どうしろというのだ」と青ざめて、殊さらに冷たくいった。いう下からお米もまた、

「帰して下さいというんです！」と肩に波を打った。

「どこへ？」

「大阪の家へ」

「虫のいいことを——だれが！」

「か、かえして、くれないとおっしゃるんですか」

「知れたこった」

「よ、ようございます——、あなたがお暇ひまをくれないなら、私は私の勝手に大阪へ行きますから。立慶河岸のお母つかさんが、危篤きとくだという早打はやうちがきているのに、帰らずにはおられませんかからね……」

「嘘をいえ、そんな、見え透すいた偽りをいつても、この啓之助が手放すものか」

「嘘ではございません、宅助に聞いてござんなさいまし、たしかに、家から手紙が来ているのですから」

「くだい！ 何といおうが、わしが大阪へ行くときには連れても行くが、そち一人でまいることはならぬ」

「そ、そんなことをいわないで……」お米は我がを折つて、啓之助の膝へ泣きくずれながら、「——すぐに帰つてきますから、どうぞ、二十日はつかほどお暇ひまを下さいまし、ほんとに、今いったような、知らせが来ているのですから」

「いけないツ」と、それでも啓之助が意地強く突ツ放すと、お米はもう嘘や頼みではきき入れられない口惜しさと捨鉢とで、

「あなたは鬼だ！ 悪魔のようなお人です！」

「才、おれは鬼だ。お前がわしをそうさせたのじゃ」

「みんなに聞いて貰います、世間の人に何もかも話してやります。お関船の底へ無体に私をほうりこんで、その上にまだ……」

「大きな声をするなッ」

「しますッ。どっちが無理か世間にきいて貰います」

「ばか、ここは剣山の麓だぞ」

「向うの目付屋敷には、竹屋三位様がいらつしやいます。三位様のお耳へ届くように、私はわざと大きな声でいつてやるのです」いきなり立って、窓の障子へ手をかけた女は、もうヒステリックにうわずつていて、放っておいたら、威嚇ばかりでなく、ほんとに、何をしゃべりだすかしれないような血相だったので、啓之助

もうろたえ気味に、

「ばか！ つまらぬことを口走るな」

と、お米の口を手でふさいで、

「そんなことが御家中へ洩れたら、わしばかりではない、二人の身の破滅ではないか」

「い、いいえ、いいえ！」

啓之助の手へ爪を立てながら、お米は、髪のこわれるのも忘れて、首を振った。

「いってやります——御家中方の耳へ」

「お米！ あまり男を見くびるなよ。そちは命が惜しくないのか

ッ」

「殺すのですか、殺すというのですか」

「ウム、どこまで口の減らぬ女め、啓之助にも、いよいよなれば、それ相応な覚悟がある」

「殺してください、死んでも私は」

「ええ、どうして貴様は、そうわしを……」

ねじ^{たお}仆して重なりあつた体が、人目もなく挑^{いど}みあつた。肺^{はいぞう}臓

の弱いお米は、啓之助に胸を押されて、苦しげに目をふさいだが、

啓之助は盲になつたように、その細い喉^{のどくび}首を抱きしめた。お米

は、さからいきれない力をふるわせて、ヨヨ……とすすり泣きを

洩らすばかりだつた。そして、殺すといい、殺してくれと叫んで

いた男と女が、気だるい春^{しゅんちゆう} 昼^{ひる}の納屋倉^{なやぐら}に、蒸れ合うばかりな

情炎の餓鬼となって苦悶した。

しばらくしてから……

「ね、今のこと」

お米は、たぼのくずれを、きやしやな指で梳すきあげながら、男に、うしろを向けていた。

「いいでしょう、ほんとに」

その姿を見るともなしに見やりながら、啓之助は腕枕をかって、グツタリと横に寝ている、酒がさめたような血色をして、

「そんなにも大阪が恋しいか」

「そりゃあ……」

髪へ手を当てたまま、そこらに落ちた鬢止めびんどを目で探して——
「生れた土地ですもの。それに、アアして、不意に来てしまった
のですもの」

啓之助も、少し哀れげを催もよおして、「じゃ、きつと半月ぐらいで
帰ってこいよ」

「行つてもよろしゅうございますか」

「うむ」

「では、これから帰つて、すぐに支度や何かをして」

女が、苦もなく急せきだすのを見ると、かれの心はまた、たやす
く手離したくないように動きだして、

「だが? ……まあ待て」と重苦しい口を濁して、そして、何か

いおうとしたことまで黙ってしまった。お米は、かれの遲疑をみると、「いいとおっしゃったのでしよう、ね、あなた」

あわてて、一生懸命に、啓之助のそばへすりよって、男の体を抱くように、

「じらさないで、後生ごしやうですから」

と、機嫌をとると、

「エイ、娼婦しょうふみたいな真似まねをするな」

啓之助は、かえって癩かんにふれた声をして、お米を突き放して起き上がりざま、ふところからつかみだした船切手ふなきつての木札を、女の膝へ叩きつけた。

「行ってこい！　だが、なんだぞ、もし大阪へ行ったきり戻らぬ

時には、キツと命を貰いにまいるぞ、いいか、それだけを忘れるなよ」

「まあ、邪推ぶかい」

「それでなくとも、貴様は劍山の隠密みたいに、隙さえあれば逃げたがっているんだ」

「そんなことがあるもんですか、きつと、一日でも早く、阿波へ帰ってまいります」

「宅助を付けてやる、あれを連れてゆけ」

「エエ、その方が、私も気強うございます」

「で、近いうちには、お関せきぶね船の便がないから、上方へ荷をだす四国屋のあきない船へのせて貰うがいい。そして、帰りには、月

の下旬に阿波へ戻る同じ船で、きつと帰つてこないと承知せぬぞ」ともすると、啓之助が気を試そうとするふうなので、お米はうれしそうな顔色を隠すことに注意していた。

と。二人のいるこの納屋蔵なやぐらのまわりへ、急ぎ足にきた人足が止まつて、

「森様——。森様はここにおいでではございませんか」戸をこじあけて入ってくる様子だ。

「あ、誰かきました」

「お米」

啓之助はあわててあたりを見廻して、納屋番の藁わらぶとんが積んであるうしろへ、女を隠した。そして自分から入口の土間へ姿を

みせ、

「啓之助はここに居るが、なんじや」

「あ、おいでなさいましたか」

入ってきたのは、劍山の山番たち、ゾロゾロと七、八人、一人が手に一本の矢を持って、漆が干からびたような鏝うるしひの血汐やじりを啓之助に見せていった。

「石牢にいる俵一八郎が死んでおります」

「えっ、一八郎が絶命した？」

「はい、何者かに、射殺されたので」

「それを見せい」

引ったくるように取ってみると、まさしく竹屋たけやさんみ三位の矢である。

この間三位卿は、問者牢のいわれを聞いてその迷信を嘲笑して
た。

そして、冗談のように、今でも隠密を殺せば徳島城にたたりが
あるかないか、試しに、世阿弥か一八郎かどちらかのひとり殺
してみたら面白いがとっていた。

また責任のない居候どのが、口に年貢のいらぬ戯れ言をいうな、
とその時は、啓之助も笑っていたが、これをみると、竹屋三位卿、
ほんとに、劍山の迷信へ、榎葉まきばの鏝やじりをうちこんでしまった。

「とにかく一八郎の死骸を片づけ、仔細を徳島城へ申しおくるこ
とにいたそう。いつもながら放恣ほうしな三位卿、困ったことをしでか

したものだ」

と眉をひそめながら、啓之助は、また鏃やじりの血の痕をみるにつけて、思わず肌を寒くした。

かれの脳裡にも、自分では意識しない迷信のおびえがあつた。

「——折も折、滑いの津のお城に、何ぞ不吉なことがなければいいが……」こう思う不快さに目をつぶつた。啓之助ばかりでなく、変を知らせてきた山番たちも、伝説の禁断を破つたことが、何となくそらおそろしい様子で、必然、この結果がなくてはならぬように信じている。

強請ゆすりにきた甲比丹の三次を、物蔭から一矢しに射た時には、三位卿の殺人好みも悪くは思えなかつたが、その放恣な矢を石牢の中

へまで放つたのは、いくら大事な食客殿としても、少し殿の優遇に狎なれすぎるきらいがある、と啓之助は、目付役という自分の職責の上から腹を立てた。

それを報告したら、さだめし太守も神経を突ツつかれるに相違ない。けれど下手へたに隠蔽いんぺいしておいて後日に分るような場合には、自分の落度とならざるを得ないから、一刻も早く徳島城へ帰つて、ありのままに上申し、向後こうごあの居候殿の放ほう縦じゆうも少し慎しむよかみうな方針をとるべく、上にも御意見しなければならぬ——と啓之助は、山番たちの前に息まいて、それぞれの指図を与え、納屋蔵の外へ追いやつた。

そして自分は、前の陰湿な部屋へ戻っていった。そこには今し

方、お米がとりみだしたすすり泣きや髪の毛の匂いが、愛慾の感情にからみやすく漂ただよっていたが、かれの頭脳あたまは不意の事件で忘れたようになつていた。

「お米、わしもにわかには、御城下へ帰る都合になつたから、すぐに支度をせい」

「え、これからすぐに」

「ウム、空も少し曇り模様、明日あすとのぼして雨にでもなると困る。疲れたであろうがすぐに立とう」

「いいえ、まだ歩けないほどではございません」

隠れていた藁わらぶとんの蔭から、そういいながら、襟えりをかきあわせて立つたお米は、徳島へではなく、大阪表へ早く帰れる都合に

なつたうれしさを、思わず顔に出している。

酔いと疲れで、だらしなく寝込んでいた仲ちゆうげん間の宅助、にわ

かに起こされてうろたえながら、またわらじの緒おを結びなおして、裏道から四、五丁出てゆくと、啓之助は菅笠あられに霰ぶの打ツさき羽織で、先に廻つて待ちあわせていた。

「もし家中の者に出会つたら、わしの側を離れて、素知らぬ振りをしてゆくがよい。吉野川へ出れば下りの舟、乗つてしまえば別に人目の心配はないわけだが」

かく匿し女を持つているのも、なかなか細心でなければならぬ。啓之助は歩きながら、たまたまくる里の百姓にも気を配つて、お米と道をひとつにして行く。

「徳島へつくと、わしは屋敷へも寮へも寄っている暇がない。さつきお前が聞いていた通りの事情で、すぐに登城して殿へ委細の報告をせねばならぬから——。で、お前は、いずれ寮へ帰った上に、何かの支度もあろうから、その間に、宅助をやつて、四国屋の荷船の都合を問い合わせてみい。それから、最前渡した船切手、あれを落さぬようにな、よいか、また大阪へまいつても、御当家のことや要いらざることを他言たごんしてはならぬぞ。宅助、そちにも何かの注意を頼んでおくぞ」

もう二里ほどは歩いたろうと思われる頃である——三人のゆく後ろから、大地に馬蹄をひびかせて、まっしぐらに駒を飛ばしてきた若者がある。

驚いて、両方へ道を開いたとたん、土を飛ばして、鞭むちをくれ、疾風一陣に駆けぬけた馬上の人——パパパッ——と十数間けん走り越したところで、急に手綱をしぼり止めたかと思うと、

「才、啓之助、啓之助！」

ふりかえって、家来のように呼んだものだ。

「——早くまいれよ、徳島城へ！ 女の足をいたわっていると間にあわんどぞ！ 江戸へ上った天堂一角より、何やら大事な知らせがまいつて、また一会議あろうと申すぞ。身にも急いで帰城せよと、阿波殿からのお招きじや。早くこい！ 早くこい！ 天下の風雲急ならんとする秋とき、女のひとりぐらいは捨てて行つてもよいではないか」

そこで、ピシリツとまた一鞭むち、悍馬かんばをあおツた竹屋三位は、菜種たねの花を蹴ちらして、もうもうと皮肉な砂煙を啓之助に残して行つた。

気がついてみると、午後も早遅いのはあろうが、にわかにも地もドンヨリと薄ぐらく、劍山の肩の一部が、まッ黒に見える以外は、いちめんなる雲であつた。その雲の裡うちには、甲賀世阿弥が、今も血汐の筆をとつて、秘帖ひじょうに精をしぼっているだろう。雲の奥か、地の果てからか、おそろしい響きが人身じんしんに感じてきた。

煙草畑たばこの娘たちは、雑草抜きをやめて姿をかくした。やがて、土佐境とささかいの空には春雷が鳴っていた。

疑心暗鬼ぎしんあんき

諏訪すわの温泉町ゆまちは、ちようど井桁いげたに家がならんでいる。どこの宿屋にも公平に内風呂というものはないので、その井いの字なりの町まのまんなかにある三棟むねの大湯へ、四方はたごの旅籠はたごのお客様がみな手てぬぐ拭いをブラ下げて蝟集いしゆうしていた。

ここは木曾路をへてくる上かみがた方の客、信濃路しなのじからくる善光寺帰たどりの旅人、和田峠をこえて江戸の方角から辿りつく旅人などが、一せき夕あかの垢あかを洗うべく温泉ゆをたのしみに必ずわらじを脱ぐので、中仙道の宿駅のうちでも指折りな繁華をみせていた。

夕方の六刻むつというど、もう三道の客が織むるように入ってくる。温泉町ゆまちの入口は馬かこや駕かこや運送の人足で埋まっていた。昼間はさしては白くもみえない湯けむりが、宿屋の軒にまでモクモクと這いだして、硫黄いおうの匂いまでがなんとなく生なま新あたらしく鼻をうつてる。

赤い前垂をかけた宿引の女が、ぶかつこうな杉下駄をはいて猫じやらしの帯をふりながら、向う側とこつち側で、互いに腕にヨリをかけるのはその時分で、

「かしわ屋でございます、かしわ屋はこちらでございます」

「桔梗屋きぎょうは手前どもで、昨年もごひいきになりました」

「ハイ、越後屋でございます」

「お馴染の鍵屋はこちらでございます」

ちようちよう

喋々 とさえざるばかりでなく、信濃そだちの強力で、笹を

ひツたくる、振分を預かつてしまふ、合羽の袖にほころびをこ

しらえる。文句をいえば、晩にわたしが縫つてあげます——と上

手に見る。またそういうのに宿引女の極伝があるそうで、わざ

とほころびをきらす女ばかり抱えておく別宿もあつたりする。

なにしろ、大湯の横にひツついている湯番小屋で、五刻の拍子

木を打ち、導引の笛がヒューと澄む頃までは、このかしましさが

がやまないのである。

「ホイ」

「ここだな」

「会田屋さん、お客様だぜ」

しもゆかど 下ノ湯の角にある大きな宿の店先へ、二挺の駕がおろされた。

「ご苦労様」

「駕屋さん、こちらへ掛けて一服お吸い」

「ようお着きなさいました」

「お洗足水を」

「いえ、お荷物はこちらへ」

女中や番頭に取り巻かれて、すすぎ盥の前へ腰かけたのは、商家の内儀らしい年増の女と、地味な縞ものを着た手代風の男であった。

足を拭いていると、帳場格子にいた会田屋の老主人が、ちらと

見て、初めて気がついたように筆を耳に挟はさんで出てきた。

「これはお珍らしいことで、四国屋のお内儀様ではございませんか」

「おや」と、つつましい笑い方に黒豆をならべたようなおはぐろの歯を見せて、

「善七さんでしたか、いつもお達者らしくて、ほんに、けっこうでございます」

「はい、おかげさまで、ありがたいことでござります。したがお内儀様、こんどもやはり善光寺へお詣りまいのお帰りでいらつしやいますか」

「ええ、それが実は、小諸こもろのほうの取引先に、ちと藍草あいくさの掛かけ

がたまりましたので、信心やら商用やら」

「おお、それじゃたいそうな廻り道で……きようはあの和田峠をお越えなさりましたな。さぞお疲れなことでございましょう」

「疲れもどこかへ消えてしまいました。その和田峠から、とんだ目にあいましたね」

「ま、そこではなんでございますから、さ、どうぞこつちへ」

「新吉や」と、手代の方へ目交めまぜをして——「お前も早くこつちへ体を隠したがよい。そんな所に坐っていると、また外から見えるじゃないか」

「四国屋様」

「はい」

「なにか外で、怖ろしいことにでもお逢いなされましたか」

「エエ、和田峠から、私たちを、つけ廻してくる侍がありましたね」

「へえ、あなた方を？ ……」

「お宅へ着いて、ホツとひと安心いたしましたが、まだこのように胸が波を打っております。誰か、お冷水ひやを一杯下さいませんか」

「怖ろしい侍たちでございました。しかもそれが三人づれで、和田峠の下りから、オーイと、私たちを呼びはじめたではございませんか」

四国屋とよばれた商家の内儀は、宿屋の老主人にこう話して、青い眉毛の痕をあとひそめた。

「ほ、三人づれの侍が？」

「ふりかえってみますと、上から早足に追ってまいります。それは、かなり間がありましたゆえ、わたしどもは怖い一心で、麓へふもとつくとすぐに駕へかご乗ってまいりましたが、気味の悪い侍たちは、それから先まで執念ぶかく駈けてきたそうでございます」

「ま、なんとという図々しい奴」

「藍草あいぐさの掛けを取ってまいりましたので、その金に目をつけられたかと存じます」

「そうかも知れませぬ。ですが、もうご安心なさいまし、ここへ

来たとして、決して泊めは致しませぬ」

「もしまた、姿でも見つけると、これから先、上方までの道中が、ほんとに思いやられます」

「そういう訳なら、早く、奥の部屋へ隠れておしまいなさいませ。

おいよ、四国屋のお内儀様を……そうだな、どこがよかろうか」

あるし 主の善七が考えていると、そのまに、四国屋のお久良くらと手代の

新吉は、案内もなしに奥の廊下へバタバタと走りこんでしまった。

妙に思つて、なんの気なしに善七が店先を見ると、今、お久良から話をきいていたばかりの三人組の侍。

「ここだろう」

「ここらしい……」と、あたりをジロジロねめ廻しながら、遠慮

なく店へ寄つてきた。

ひとりは熊谷笠くまがいがさをかぶり、ひとりは総髪そうはつ、そのうしろには、

底光りのする眼をもった黒頭巾くろぎ黒着の武士。

これはいうまでもなく、お十夜とほかふたりの者である。和田峠の中腹を下つてきた時、周馬と一角が、先へ遠く急いでゆく男女のうしろ姿をみとめて、あれこそ、お綱と万吉に相違ないばかり、にわかには意気こんで、足を早めて追いかけたのだ。

すると、追えば追うほど、いよいよ先の男女ふたりが、後もみずに逃げだす様子なので、初めの怪しみは、的確に、それと思いこむようになつてしまった。

「駕のついたのはたしかにここだ」と周馬が会田屋あいだやの前で明言す

ると、お十夜と一角がズツと中をさし覗のぞきながら、ゆるせよ、と声をかけて、すぐに埃ほこりをハタき笠と振分を投げだしそうにした。

外にいた客引の女が、それと知って、あわてて洗足すすぎ水あるじだらいをそこへすえると、帳場のわきに立って眼を丸くしていた主の善七、びつくりして店先へ飛んでくるなり、

「ばか！」と、女をどなりつけた。

「もうどの部屋もいッぱいで、御案内する座敷もないのに、なんでお断りしないのだ。気のきかないやつめ、ましてやお武家様方へ、しッ、失礼千万な」

叱こごとられた女は、いったい、何がどうした叱言こごとなのかわからないが、客商売の断るかけひきはままたるので、そのまま、口をつぐ

んでいる。

「どうも申し訳がございません」

善七は如才なく両手をついて、

「せっかくでございませうが、上も下も、折悪おりあしくふさがりまして、

御用に足りませうような座敷は一つもござりませぬ。まことに申しかねますが、どうぞほか様へひとつお越しのほどを」

三人は黙って顔を見合せたが、こう不自然な断り方をされてみると、一層、ここへ逃げこんだ男女ふたりがてつきりそれと思われるし、善七の方にしてみれば、そう疑ってくる三人組の侍が、ますます道中稼ぎの浪人者とみてとれる。

「そうか、座敷がないとあらば、無理に泊ろうとはいわぬが……」

と天堂一角、傷の片腕を胸に曲げ、熊谷笠のうちから亭主おもての面を睨みつけた。

「今し方のこと、当家へわらじをぬいだ男女がある筈、それをここへ呼びだして貰いたい」

「おまちがいではございませんか……私どもには、いつこうそんなお客様は」

「隠すな！ たしかに見届けてまいったのだ」

「いえ、決して、隠しなどを」

「では出せ、その者をこれへ出せ！」

「でも、そういうお客様は、ハイ、今し方ならなおのこと、男女ふたりづれのお泊りはございませぬ」と、一角の威嚇いかくを巧みたくにうけて、

どこまでも善七が言いぬけていると、側にみていたお十夜が、ちえツと、齒がゆそうに癩かんを起こして、

「やい、亭主、甘くみてたかをくくつてしていると、気の毒だが、土足で家探しという荒療治になるぞ、いくら茶代をハズまれたかしらねえが、それとこれと、どっちが算盤玉そろばんたまに合うか、よく考えて返辞をしろ」

これはまるでムキ出しな浪人ろうにんでんぼう伝法。一角ほど肩かたひじ肱は張らないが、その代りに、黙つて刀が先にものをいいそうさだ。

大湯の八間燈はちけんや宿屋の軒行燈のきあんどんにちようど灯の入る刻限なので、退屈な温泉ゆの客と入りこんでくる旅人が、たちまち輪になつて、会田屋の前をふさいでしまった。

「見世物ではないぞ、なんでそこらに立つか！ あつちへ行け、あつちへ行け」

旅川周馬は、お十夜と背なかあわせに向いて、むらがる弥次馬を追っぱらいながら、顎あごのいきびをつぶしている。

そのうちに、湯番がきて、会田屋の肩をもったり、喧嘩と思いちがいで、仲裁に入る侍が出たりして、お十夜のかけあいも、ついに、一場の喜劇となつてしまった。

土地には土地の約束もあるし、ことに、温泉町ゆまちのような場所には、犯すべからざる旅客の掟おきてがある。いくら一角じらいの自来也やぎや靴や、周馬の風采にひと癖ありとみえても、めつたにそれを破らすもの

ではない。

なおこれ以上の騒動を起こすと松本の代官所からやつかいな者が出張でばつてくる懸念もあり、かたがた衆人環視の中なので、ぜひなく三人は、会田屋の前を離れた。

しかし、そこを去ったとはいうものの、もとより素直すなおにこの諏訪わの温泉ゆの町を出てしまったわけでは無論ない。七、八歩あるいて、すぐ前の十三屋という家へ入った。そして、会田屋の二階と向い合っている表二階を明けさせて、ここから前の出口を見届けようということになった。

さらに、それでも不安な点があるので、宿の者に過分な心づけを与えて、あの時刻に、会田屋へ入った男女ふたりの客が、裏口からで

も立つた時には早速知らせてくれと、念入りに手を廻して、さて、やつと、旅装を解いたのである。

周馬もどてらになり、一角もどてらに着かえたが、お十夜は着流しなので、あえてその必要もなく、茶をすすっていると、それを残して、二人はいつのまにか外の温泉ゆにつかてきた。

「なかなかいい温泉だ、お十夜も一風呂ザツと浴びてこないか」
「おれは後で行くよ、寝しなに」

膳しじみがくる。 蜆しじみ汁じの椀わん、鯉きのあらめい、木の芽め田でん楽がく、それに酒。

信州路へ入つて、鯉の料理にお目にかからない日はないぞ——
といいながら、周馬が椀わんをチュツとすすつて、うむ、こいつはい

い、諏訪湖すわこの味がするぞという。

このあたりで古い歴史のある俚謡りよう、木曾ぶしの絃歌が、赤く曇った湯気の町にサンザめきだす頃になると、

「どうだ、ひとつよぼうか」

と周馬がぬけめのない提案をもちだすと、「なにを？」と一角が通じない反問をする。

「なにをって、すなわち、唄うたい女めをさ」

返辞をしないで一角は、またのび上がって会田屋の門口を見おろしていた。お十夜は何をおかしく感じたか、周馬の顔をみて苦笑をもらし、それを隠すべく杯さかずきをさした。

平凡なる一夜をすごして、翌朝、起きるやいな、見張りを頼ん

でおいた宿の者をよんで、会田屋の男女ふたりが立ったかどうかを問いた。ただすと、まだたしかに落ちついているという返辞。

その宿の男は、きのう、三人が会田屋の店に立った少し前に、駕を出て前の家に入った男女を見届けているということをしているので、お十夜も一角も、すっかりこの男の見張りを信頼していた。

けれど、この男の見届けた事実には相違はなく、和田峠から追ってきた自分たちの眼が錯覚さっかくをおこしているのだとは、今にいたつても気がつかない。

遂にまたそれに惹ひかれて、一日を暮らしてしまった。そして、一角も周馬も寝しずまった真夜中である。お十夜はただひとり、

緒おのゆるい宿屋の下駄を突っかけて、屋根へ大きな石が幾つものせてある大湯おおゆの浴槽へつかりに出かけた。

どこもかしこも、昼のように明るく燈ともしがつき放しになっているが、疲れたような空気がシーンと沈んでいる。孫兵衛は空を仰いで青い星を見た、どこの二階の障子にも影法師がない。

いつもかれのみは、こういう時刻を好んで湯にひたる習慣である。習慣というよりは努めているのだろう、とかく人に疑惑されている十夜頭巾を解くのに、ひとりの者が側にあつてもならない。だが、今頃になれば大湯おおゆの中にも誰もおりはしまい。

もうもうと白い湯けむりをあげている板囲いの浴槽は、上かみノ湯、中なかノ湯と二棟に別れて長屋ながやなりにつづいている。孫兵衛は歩みよ

つた頃からまず中ノ湯の戸をぐわらツとあけて、ふと、脱衣場の
 棚をみると、女の帯と寝衣ねまきがおいてあつた。

で孫兵衛。それを避けて上ノ湯の方へ歩みだした。板囲いの戸
 が細目に開いているので、覗いてみると、いッぱいな湯けむりで
 中はもうとじているが、チヨロチヨロと温泉ゆが湧きこぼれる音の
 ほか別に人気ひとけもないらしいので、スツと土間口へ足を入れ、腰の
 助広を取つて棚へおこうとすると、からりと、鞆さやにふれて鳴つた
 ものがある。

見ると、尺八、いや、それと同じような一節切ひとよぎりの竹と天蓋てんがい。

——これはまずい、あいにくとここにも誰か湯浴みゆあをしているや

つがある——と舌打ちをしてフト向うへ眸をこらすと、湯氣にまぎらわしい鼠色の衣を着た一人の虚無僧、掛絡けらくを外し、丸ぐけの帯を解き、これから湯壺へ入ろうとしている。

何思ったか、かれは、いきなりそこを飛び出し、宿の二階へ戻つてくるやいな、寢酒に酔つて正体もなく眠っている周馬と一角とを揺ゆすぶり起こして、

「おい、起きろ、すぐに支度をしろ、支度を」

不意に夢を破られて、赤い眼を洩そうにあいた二人は、時ならぬ頃に、お十夜があわただしい態さまをキョトンとして眺めながら、

「なにを騒いでいるのだ」

と枕あごに顎を乗せたけれど、容易に立ち上がりそうもない。

「意外なやつに出会ったぞ。まあいいから、とにかく起き上がってくれ」

「起きろというのか」

「ぐずぐずしているまには、またとない機会をのがしてしまうことになる」と孫兵衛は、用捨ようしやなく二人の夜具をはねのけた。かくてはいかに横着な周馬でも一角でも、安閑と寝てはられないので、それと一緒に飛び上がった、

「では、会田屋に泊っているやつが、宿をぬけだして行ったのだろう」と、当然そうあるべきことと、思い当るところをいつたが、孫兵衛はそれでもないとかぶりを振って、枕元の水挿みずさしを取り、「とにかく、こいつをグーと飲んで、よく眼をさまして貰いたい。

その上で話すでしょう」

「ふム？ ……」と一角は、やや怪訝な顔をしたが、すすめられるまでもなく、酔よざめのほしかったところなので、それを取って水挿の口から喉のどを鳴らして飲み干し、周馬にもすすめると、周馬は事態の容易ならぬさまにやや寒さをもよおしたらしく、いらない、とばかり身を硬くしてお十夜の面をジツと見つめている。

「ところで、何だ、お十夜」

「周馬」

「ウム」

「一角」

「才才」

「法のりづきげん月弦之丞のじょうがツイ鼻の先に来ているぞ」

「えつ……弦之丞が」

この一句は一斗との酔よざめの水いをのむより二人の目を冴えさせてしまった。

「——今おれが何の気もなく上ノ湯へ行つたところが、そこに一人の虚無僧がいる。湯気にさえぎられて先ではこつちの姿を見なかつたらしいが、おれの眼にはしかと分つた、まちがいなく法月弦之丞、ちようど温泉ゆにつかっている頃だから、そこを襲つてやろうと思うがどうだ」

「よしッ。いい所を見つけてきた」

一角こじりが鎧こじりを突いて立つと、旅川周馬、

「だが、待ちたまえ」と、沈着を装って、

「江戸表で探った所から推すと、その弦之丞は、もうとくに、垂^た井^{るい}の国分寺に着いて、道者船の出る日を待ちあわせている筈だ。それが、いまだにこの辺にいるというのは腑^ふに落ちないように思うが……」

「腑に落ちても落ちないでも、この孫兵衛が見届けてきた事実をどうする」

「しかし、疑心暗鬼ということもあるから」

「疑心暗鬼？」

「常に弦之丞のことを念頭にえがいているため、その錯^{さつ}覚^{かく}で、縁なき虚無僧までが、それらしく見える場合もない限りではない」

「ちえツ、また周馬が小理窟こりくつをならべだした。時刻を移して、これに先手を打たれては大変だ。お十夜！ こんにやく問答をしている場合ではあるまい、すぐに行こう！」

自来也じらいや鞆たばの下緒さげおをしごいて、一角が性急にそこを出たので、孫兵衛もまた、周馬をすてて梯子はしごを下り、周馬もまた、いやおうなくついで、宿の外へ飛び出した。

深夜、人なき浴槽に身をひたして、こんこんと噴ふきだす温泉いでゆのせせらぎに耳心じしんを洗いながら、快い疲れをおぼえていた法月弦之丞は、やがて湯から上がって衣類をつけなおした。

常木つねき鴻山こうざんと松平左京之介まつだいらさきよしのすけのほかは、誰も知らぬまに、代

々木莊を出立したかれである。日程ひどしりにすれば、もうとくに美濃路みのじに入っている筈だが、道者船にのりあわせるには、向うでだいぶ待つことになるので、わざと道を迂回うかいして、屋代上田やしろうえだなどに旧知の剣友をたずね、さながら的あてなき旅をするもののように、今日も夜にかけて峠を越え、この温泉町ゆまちに辿りたどついたのを幸いに、自然の報謝をうけて、旅の垢あかを洗っていたのだ。

さて、久しぶりに爽そうかい快な気を味わったが、時刻はいたって都合が悪い、もう夜半よわもすぎてやがて五更ごこうになる頃おい、宿をとる間はなし、といってこれから塩尻の高原へかかるのも早過ぎる気がするし？ ……。

ままよ、かりそめにせよ、普化僧ふけそうの法衣ほうえを借りてある以上は、

樹下石上も否むべきではない。道に任せて歩き、疲れた所を宿として草にも伏そう。と笛袋をさし、天蓋をかぶりかけていると、湯小屋の戸がガタンと動いた。

が、風でも吹き去ったのか、そのまま誰も入ってくる様子はないので、かれは片足立ちになって、わらじの緒を結んでいた。と、またかすかな音が外でする、人のあしおと音低いささやき……、それは耳に触れる程なものでもないにしても、かれの心耳には明らかかな空気の動揺を感じられた。

試みに戸へ手をかけて、一、二寸、ズズ……と引いてみると、外からひっそりした夜気がスーと流れこんでくるだけで、格別なこともないが、なにか、一脈の殺気が弦之丞の面を打ってくるよ

うに思われる。もつとも、かれには、最前ここをあけた男が、妙にそそくさと戻って行つた不審もあつたところだが……。

「はてな、これはおかしい」と気づいたので、かれは湯小屋の羽目へ背中を貼りつけたまま、サツと不意に引き開くと、それを待ちかまえていたらしい者が、ふいに躍りこんでくるなり、白刃をふつて湯けむりの空^{くう}を斬つた。

さてはと、足をあげて弦之丞、その男の腰とおぼしい所を蹴つて放す。

ドボンと湯槽^{ゆづね}の中に湯の飛沫^{しぶき}が立つた。さだめし首^{くび}から先に突ツ込んだのであろう。ぷツ……と濡れ鼠^{ねずみ}になつて喚^{わめ}いたのは旅川周馬。

「一角ツ、早く助劍じよけんを！」

いうまに弦之丞は、戸口から外へ足を踏みだした。とたんである。右に添って隠れていた一角の大刀、左に息をのんでいたお十夜の助広すけひろが、かれの姿を待ちかまえていた。

足をすくつた孫兵衛の刀は、風を流して湯小屋の柱へズンと食いこみ、一角の烈刀は一節切ひとよぎりの竹にはね返されて、柄手つかでにきびしいしびれを感じたばかり。

人を斬らんとする程の力で、柱へ斬りこんだそぼろ助広は、とつき、たやすくは抜きとれないので、気をいらつた孫兵衛は刀をそこに残したまま、ダツ——と追つて弦之丞の後ろに組みつき、ここぞという一念を拵指おやゆびにこめて、相手の喉のどにくいこませたま

ま、

「一角、わき腹を突け！」と呶鳴った。けれど、寄り進んできた天堂の前には、そう呶鳴った孫兵衛そのものの体が、もんどり打って躍ってきたので、ふりかぶった大刀を無碍むげにふって落せば、弦之丞を打つ前に、お十夜を両断にしてしまったかもしれない。

この一瞬に三人は、前後も場所がらも時刻も忘れて、すさまじい声と気合を発したのであろう。たちまち、四方に密集している温泉宿の二階や店先には、何ごとかと驚いたふうな人影が立って、またぞろ静かな温泉ゆの町の平和はおびやかされてしまった。

もちの木坂きざか

木曾福島の関所の高地から目の下の宿しゆくを見おろすと、屋根へ石をのせた家ばかりが櫛しつ比びしていて、ちようど豆板という菓子でも干ほしてあるような奇観。

その関所の西口から急落している石段を、今、ひとりの儒者じゆしやふうの男、肩から紐ひもで合財袋がっさいぶくろと小瓢こふくべをさげ、その小瓢のごとく飄々ひようひようこ乎として降りてくる。

宿しゆくへ入ると、瓢先生ふくべ、左右に軒をつらねている名物屋を、しきりに右顧うこし左眊さべんして、干ほし岩魚いわなの味をたずね、骨接薬ほねつぎぐすりの匂いをかぎ、檜細工ひのきざいくや干瓢屋かんぴようやの軒さきにまで立つたが、ベツになんにも買いはしない。

あまつさえお六櫛ぐしを造る店の前では、がらにもなく挿櫛さしぐしや鬢び櫛ぐしを手にとつて、仔細にその細工のあとを眺め、ふところから日誌をだして二、三種の形を写した上、値だんも聞かずに、またその先へぶらぶら歩いて行つてしまふ。

すこし變つてゐる男だ。

いたつて悠長な旅には違ひない。後からくる旅人がいくら先へ追い越して行こうと、駕屋かごやが声をかけようと、一向気にとめる風もないが、何かに見とれている場合、不意に馬の長い顔が肩へ食いつきそうにでもなる時は、さすがに少し驚いて蛙のように横へ飛ぶ。

すると、この宿しゆくの出はずれには、あだかも、この変り者を待ち

設けていたように風変りな店が控えていた。

木曾街道で有名な、ももんじ店だである。隣から隣へつづいて半丁ばかりの両側は、みな、大熊、熊の胆い、貂てんの皮、などという看板をかけた店ばかり。狐し、猪こくま、小熊の生けるを檻おりに飼って往来の目をひく店もあり、美び々しい奇鳥の啼なき声に人足ひとあしを呼ぼうとする家もある。そして、獣皮じゅうひ、獣蠟じゅうろう、膏藥こうやく、角細工つのさいく、馬具革くがわ、袋ものなど、あらゆる獣産物じゅうさんぶつを売っている。

瓢ふく、べ先生は、果たしてこの奇なる景観にうたれたとみえて、やがて百獸店ももんじだの一軒へ、ずつと寄って行ったかと思うと、その店先へ腰をおろした。

「いらつしやいまし、熊の胆いをさしあげますか」

亭主が早くも貝殻の詰まった箱を持ちかけると、かれは侮辱されたように、その熊の胆を舐めたと同じ顔をして、

「そんな物はいらん。わしは医者だからな」

と、店の中を見廻した。

「ああ、なるほど」

亭主は自分の魯鈍ろどんに感心した。

細くつめて結んだ鬚まげなり風采なりが、医者といわれればどう眺めても医者である。

「黒貂くろてんのぼんがあるかい」

「？ ……ぼん 何でございましょうか」

「てのひらだよ、黒い貂てんの」

「ああ、なるほど」とまたうなずいたが、

「どうもおあいにく様で。それにいくら木曾の山中でも黒毛の貂てんなどはめつたに捕れません」

「じゃ、こんど出た時に送って貰おう」

「おうけあいではありませんが、お所だけ伺っておいてみましょう」

「ム、わしは、大阪の九条村、平賀源内というものだよ」

「あ、平賀先生で、お名まえは伺ってありました。どちらへお越しでございますか」

「御おんたけ岳へ薬草採りにまいったが、どうも、ほしいものがあまりなくてな……。だがまた、意外な儲もつけ物もいたしたよ。これ」と合財袋の口をのぞかせて、採集してきた草根そうこん木皮もくひを一掴つかみつか

んで見せていたが、その時、ふと店先を過ぎてゆく旅人の姿に目を追つて、

「ではまた、なんぞ要いる品があつた時には、手紙を出して注文するから、よろしく頼むよ」

あわてて百獸店ももんじだなを出た源内は、七、八間ほど走りだすと、先へゆく二人づれの後ろへ、

「おい、万吉。そこへゆくのは、天満の万吉ではないか」と呼んで煽あおぐように手をふつた。

声に気がついて、足を止めた先の者は、中仙道の順路を辿たどつてこの木曾街道のなかばにある目明しの万吉とお綱であつた。

通りすがった姿を見かけて、百獸店ももんじだなから追つてきた源内は、とんだよい道みちづれを見つけた気で、緩々かんかんたる歩調とのどかなあるきばなしに、木曾風俗の漫評まんびようや、御岳山おんたけさんの裏谷で採った薬草の効能や、そうかと思うと、近頃、大阪に見えない鴻山こうざんはどうしたろうとか、俵一八郎の伝書鳩はどうだとか、木曾のお六ぐし櫛に朱漆しゅううるしをかけてミネに銀の金具をかぶせ、こいつをひとつ源内櫛めいと銘めいをうって花柳界はやに流行はやらせてみたら面白おもしろいろうとか、それからそれへ、とめどもなくしゃべりつづける。

おかげでお綱と万吉は、数里の道のりをいつのまにか歩いたが、御岳の薬草やお六櫛のことなどは、二人の旅たびに他山たざんの石ほどの値打もない。だが、どうせ歩く道はひとつなので、その晩は須原の

駅とまに泊りをとつて、同じ部屋にくつろぐと、晩酌ばんしやくの話にまた源内流の旅行要心談がでる。

まず駅舎へついたら、土地の東西南北、宿やどの雪隠せつちんや裏表を第一に睨にらんでおくこと。刀脇かたなわきざし差はこじりを背中で挟はさむくらいに床の下へさしこんで寝ること。隣座敷ごとする碁将棋ごの音や浄瑠璃じようるりなどには決して口をつりこまれぬこと。またこういう物を持つて歩くと便利だよと、智慧の環わのような金具を出して五ツの鈎かぎに解き放し、それを長押ながげしへ一つずつ懸けて、笠、衣類、合財袋、煙草入れ、旅の身しんしやう上うへをのこらずこれに吊つてみせる。

駕かごに酔よつたのは船暈ふなよいより気もちが悪い。酔い癖のある者は駕の戸をあけて乗るがいい。ムカムカ頭痛がしてきた時には、熱湯

に生姜しょうがの絞り汁しぼを入れて呑む。ことに女は鳩尾みぞおちをシツカリと締めて乗ることだ、とこれはお綱のほうへ向いていった。

船もなかなか難儀なものだ。ひどく酔う者は血まで吐く。硫黄いおうか懐中付木つけぎをふところにして乗ると船に酔わないというが、ひどく船酔いした時には、半夏陳皮はんげちんぴ茯苓ふくりようの三味を合せて吞ませるさ、だが、そんな物のない場合が多いから、しかる時には、童子の便をのますとたちまち効果がある。きたないというなかれ、血を吐くよりはましではないか、もし童子便なき時は、大人の尿にょうを吞ますべし——と鹿つめらしく講義をしたが、これは、阿波へ行こうという考えの万吉とお綱に、参考とまではならなくとも、ちよつと耳をひかれた話。

なお、田螺たにしを妙いりつけて旅先で用うれば水あたりのうれいがな
い。笠の下へ桃の葉をしいてかぶれば日射病にかからない。足の
土踏まずが熱して腫はれ痛いたむ時にはみみずを泥のまま摺すりつぶして
塗ること秘方の一つ。苦参くじんという草を床の下へ敷いて寝るか、枳からたち
の葉を抱いて寝ると蚤のみよけになるということにまで源内談義が及
びかけた時——不意に、今までヒツソリしていた隣り座敷で、

「だ、だッてお前、どの顔さげて、阿波へ帰れるものじゃない：
…」

声をたかぶらせていう者がある。

シク、シクと嗚咽おえつする様子が女であつた、連れとみえて慰めて
いる。若い男で、その婦人の召使であるらしい。

「ま、お内儀様かみさま、そう取りつめて、お考えなさるからいけません。阿波へお帰りなさらぬの、死んでしまうなどと、そんなにまで……」

「お前は奉公人だから、そうまでは思うまいが、私にしてみれば、面目なくて、このまま旦那様へは顔が合されません」

「いえ、私もお内儀様かみさまについてきながら、こういう大事をひき起こしたのですから、その罪は同じでござります。けれど、お金のことでですから、死んでお詫びをしたところで、それが戻るという訳じやなし」

「でもお前、こんどの掛かけは少ないけれど、藍年貢あいねんぐの足しにするお金で、私の戻りを待っている場合じやないか、それをお前……」

…それをあんな者にゆすり盗^とられて」

阿波——という言葉がでたのでお綱はそのほうへ耳を澄ました。万吉もどうやら事情があるらしいことと、思わず膝を起こしかける。

けれど源内は、さつきも説いた旅行要心の心得通りに、それを抑え自分の声をひそめてしまった。

あらかた察しがついたので、源内と万吉は相談の上、境の襖^{ふすま}をあけて隣り座敷へ入って行った。

途方にくれた様子で、そこにいた内儀と手代風の男は、先頃、和田峠でも人違いをされて、諏訪^{すわ}の会田屋^{あいだや}へ逃げこんだ四国屋の

お久良と手代の新吉であつた。

事情をきいてみるとこの二人は、あの時の難儀をどうにか遁れ
たと思うと、こんどは真正銘のゴマの蠅はえに目ぼしをつけられて、
四日四晩もつきまとわれたあげく、とうとうこの宿しゆくの一ツ手前に
ある人なき峠で、腰帯にくるんだままの掛けの大金をゴマの蠅に
強奪されてしまった。それもただの金ならいいが、藍あいと煙草の年
貢金んぐとして、蜂須賀様へ納めなければならぬ急場に持つて帰る
途中なので、国元で、首を長くして待つている主人へ、どうにも
顔向けがならないので……と、思わず取り乱した理由わけを話したり、
合あい宿やどの方の旅情まで不愉快にしてすまぬという詫わびをのべる。
これが癩しやくの病とか霍かく乱らんとかいう話なら、源内にも応急策はい

ろいろあるが、少なからぬ大金ではあるし、相手がよほど腕のすごいゴマの蠅ときいては、どうも匙加減さじの及ぶ所ではない。これはよろしく職掌がらの目明しの万吉がいい相談相手であろうと、自分は精神的に慰めだけをいうに止めて、先へ臥床ふしどへ入ってしまった。

翌朝は源内、かねて名古屋へ廻る予定なので、一同に別れをつけ、先へ宿を立つて行ったが、四国屋の者と万吉とお綱とは、午ひる近くまで宿に残ってそこの二階から前の街道を見張っていた。

するとやがて、皿のような眼をして、通る旅人を見ていた手代の新吉が、

「あいつだ、もし、あいつです、あいつです」と、障子の蔭から

指さして万吉とお綱に教えた。

「あ、じゃ向う側に添ってゆく、あの青髯あおひげのこい大男ですね」

「そうです、赤銅しゃくどうづく作りの脇差をさしている。あ、こつちを覗みやがった、気がついていいのかしら？」

「じゃ、万吉さん、すぐ戻ってくるから、支度をして、宿屋の門まで出ていておくれ」と、どういう相談ができていいのか、お綱はひとりで梯子はしごを下りて行ったかと思うと、もう門を出て、ゴマの蠅の後になり先になりして、五、六町ほど歩いて行った。

残ったほうの万吉は、宿の勘定や旅支度など、すっかりすまして駕を頼んだ。けれど自分は乗らずにお久良と新吉だけをその中へ隠して、しばらく帳場で四方山よもやまの話をしている。

と——そこで煙草を五、六服吸ったかと思うと、お綱が、すこし微笑しながら帰ってきた。そして、結び丸めた腰帯を、

「この品でしよう？」

お久良の駕の中へ落してやった。ザクリという金の音がした。あつ——とびっくりして、うれしまぎれに駕から飛びだそうとするのを、万吉が抑えるようにして、

「き、急いで、今のうちに道をはかどっておしまいなせえ。なに、礼なんかには及ばねえ、御縁があつたらまた会いましょう」

無理に別れて二人の駕を先に立たせ、お綱と自分とは後からブラブラ歩きだした。

そして中川原の立場たてばまでくると、さっきのゴマの蠅が、道しる

べの石へ自分の笠をかぶせ、あたりの草の上へ荷物や帯を解きちらして、何か紛失物でもしたように、蚤取り眼のみとまなこでバタバタと着物をはたいては考えている姿が見かけられた。

万吉は思わずプツと吹き出して、口を抑えて横向きに通りすぎた。お綱も横目で見たことは見て行つたが、なんの表情も現わさなかつた。人を助けるためにしても、よしまたそれがどういう理由でも、掏すられた者のうろたえざまをみるのは、かれの懺悔ざんげしん心が人知れぬ痛みを感じる。

美濃へ入つて垂井たるいの国分寺へもやがて近くなつた。日いち日とはかどる旅の春も深くなつてゆく。

国分寺につけば、そこで法月弦之丞に会えようと思うことを張合いにして、お綱と万吉は、その日、夕照ゆうでりをみながら少し無理な道みちのりをかけ、もちの木坂の登りにかかった。

「男でさえも足の筋が針金のように突つ張つてきたくらいだから、お綱さん、お前めえはさぞくたびれたことだろう」

坂の中途に立ち止まって、汗ばむ胸へ手拭を入れた。そこからはるかに見渡すと、漠ぼくとした雲の海に加賀の白山はくさんが群巒ぐんらんをぬいて望まれる。

「いいえ、阿波へ越えて劍つるぎ山さんまで行き着こうというのですもの、これくらいな所でくたびれてしまつてどうなるものじゃありませんよ」

「そうよな、まだほんとうの難所はこれから先だ、血の池があるか針の山が待っているか、どつちにしても命がけの……」そういいながら、まだどれほどの登りだろうかと、もちの木坂の勾配こうばいを見上げると、その中途に、名古屋へ出る裏街道の辻があつて、目印の七本松がそびえている。

深山みやま笹いさに夕風がそよいで、ひと足ごとに落日の紅耀こうようがうすれてゆく。ぶらぶら上つてその辻まできてみると、椿つばきと藪やぶに埋まつて西さい行いぎ法師ぼうしの歌碑うたがみがあり、それと並んで低い竹垣根を結ゆい廻した高札場こうさつばがある。みると、宿しゆく役やくの布告ふこくや、何者かの人相書にんさうや、雑多なものがベタベタと貼はりつけてあるが、目につくのはその側わきに、別に立っている生新しい一本の立札。

なにげなく立ち寄つた万吉、読み下してみてもサツと色を変えた。それは二人がこれから指して行こうとする垂井たるいの国分寺から出た寺てら触ふれで、春の道者船停止どうじゃぶねていしの沙汰が公示してある。

例年当寺ニテ執シユギヨウ行アワノ阿波丈六寺代印可ノ儀併ナラビニ遍路ヘンロニ人
 便乗ノ扱ニワカイ等俄アシユウケニ阿州家ヨリ御差止オサシトメ有コレアリソウロウ之候モツヲ以テ中
 止ソウロウオアキブネイタシ候尚秋船ノ遍路ハ其折ソノオリサイコクモウ再告申スベキ事コト。

「あ！ ……こ、こりやいけねえ」

高札の真偽を疑い、おのれの眼を疑うように、万吉はくり返しくり返しそれを読みつづけたが、

「ウーム、こういう沙汰が阿波から出たとすると、いつのまにか蜂須賀家では、もう用意を固めているものとみえる」

「じゃ、この春は、遍路の者の船まで止めてしまったのかしら」
「そういうふうを書いてあるが」

「とすると……弦之丞様は？」

「さあ、どうしたか、この模様変りとすれば、国分寺に足をとめている筈はありますまい」

嘆息ためいきといっしよに腕を組んで触札ふれふだを睨みつけていたが、も

う意地もなく気をくじいてしまったように、

「まずかった！」と臍ほぞをかんで悔むのだった。

「俺としたことが、思えばとんだ手ぬかりをやっていた。阿波へ

入る目標めあてにばかり気をとられていて、こっちの内幕を探られてい
ることを、少しも頭においていなかったのが大失策——、こりや
あ天堂一角が、江戸から本国へいちいち早打をうって知らしてい
たので、こっちの先手を越して道者船を取止めたのに違えねえ。
ウウム。これじゃまた阿波へ足ぶみをする道順が、百倍も千倍も
大困難になつてきたわえ」

腸はらわたをしぼるような万吉の呻うめきをきいて、お綱も落胆のあまりそ
こへ坐つてしまいたくなくなった。進んでいいか退いていいか、その
利害を思慮してみる勇氣さえない。

垂井たるいまで行けば、弦之丞にも会えるだろうし、国分寺の印可いんか
うけて、目的地への渡海もたやすくできるものと、互に励ましあ

つてきただけに、二人は希望の目前を絶壁に塞がれて、茫とした
 当惑に立ちつくしてしまった。

すると、坂の中腹、少し平地ひらちになつた草原と空茶店あきちやみせから、ひ
 とりの武士、いたちのように顔を出した。

こなたの高札場に立っている、お綱と万吉のうしろ姿を眺めて、
 首を引つこめたかと思うと、こんどはその中から四、五人の侍が
 飛びだして、青い夕闇をすかしているような眼まなざし。

指さしながら、何かひそひそとささやきあつていたかと思うと、
 やがて中のひとりが、二本の指を唇へ当てた。

と——不意に静かに、夕風をうごかして、笹鳴りの音ささなか、水の
 響きかとはばかり、あたりへ鳴つてひろがったのは呼子よびこの笛——。

赤い芽めをもった檜かしの林に、ありやなしやの宵月がほのかだ。

あやしげな呼子の音ねに、万吉はぎよツとしてお綱に目くばせした。そして高札の前を離れるやいな、のめるようにもちの木坂を駈かけ上がった。

とたんに崖がけの両側からバラバラと飛び下りて来た野袴のばかまの武士、前をふさいで十人あまり、いずれも嚴重な草鞋わらじがけ、柄頭つかがしらをそろえて、

「待てッ」

坂の上から押ししかかって、二人を前の場所まで突き戻してきた。とみれば、中腹の平地にも、三々伍々の人影が草や石に腰を下

ろして、その光景を眺めている。都会の武士らしからぬ言語風俗、まぎれもなくこの者たちは、阿波の国から急行してきたか、あるいは命をうけて安治川の阿州屋敷から出張でばつたものか、いずれにせよ蜂須賀の原士はらしなるには相違ない。

「おい！ こつちへ——」

ヌツと立つてさしまねいたのは、最前呼子を吹いた原士、坂の上から押し戻してきた者たちへこういつて、一同草原のまん中に待ちかまえていると、お綱は利腕ききょうでを取られ、万吉は万吉でその襟えりがみをつかまれたまま、否いやおう応なくそこへ取り囲まれてきた。

「貴様だろう！ 江戸表から阿波へまぎれ込もうとしてきた目明しの万吉はツ。ウヌ、そこにいるのこそ見返りお綱という女に違

いない。望みにまかせて劍山へ連れて行ってやる、わざわざ迎えにきてやったのだ、神妙にしろよ」

こういう渡すと左右にいた原土が、バラリツと二人の前へ繩を解いた。万吉は飛びすきつてお綱の身をかばったが、わざとおののく様子をみせて、

「な、何をなさいますんで——ちつともわけが分りません、私どもは商用がてら御岳詣りみたけまいをしてきた帰りの者で、お言葉のような者ではございません。お人違いじゃございませんか」

「その白しろをきる面つらが、なんで今向うの高札の前にあんな様子をしてお立ちすくんでいたか。貴様たちをはじめ法のりづき月弦之丞が、この木曾街道へかかることを承知して、罨わなを掛けて待っていたのだ。

その逃げ口上は通用せぬ」

「どうおつしやいまして、そんな者でないことにはしかたがございませぬ、へい、私は今も申し上げた通りの旅商人たびあきんど、これは妹の……」あくまでも言いのがれてみようと思死の弁をふるつて
いると、向うの空茶店の蔭から、頭から褌つまさき先まで真つ黒に着流
したひとりの浪人者、ふところ手をしてそれへ出てきながら、

「よせよ、万吉」

と、せせら笑いをうかべて側に立った。

ひよいと見ると、青白い夕月をうけて頭巾の顔——意外やお十
夜孫兵衛だ。

「あつ」

と万吉、もう言いのがれの及ばぬはめ、手を振りきつて立とうとする、原士の者と一緒にうしろに立っていた旅川周馬が、

「どこへ行く」

たぶさをつかんで後ろへ仆した。

それを眺めながら、孫兵衛、手も出さずに苦笑にがわらいをかすめさせて、

「よせよ、万吉、そのジタバタが野暮というものだ。てめえも天満んまの万吉とかいって、二十五万石の大国へ十手を振りあげた男じやねえか。その上望みどおりに劍山で、生涯終らしてやるといふ迎えの御人数へ、手対てむかいをしては罰があたるぞ」——孫兵衛の言葉が続いているうちであつた。もちの木坂の裏道から、樹葉じゅようを

分けて駈け登つてきた編笠あみがさの男。

息がきれたか、途中の岩石に立ち、ホツと麓ふもとのほうへ眼をつけていたが、やがてまた、栗鼠りすのごとき素早さで、岩や根笹をつかみながら、一同のいる平地の一端へその姿を躍り立たせた。

何か？ —— という気色けしきで、皆の眼がハツとそれへ惹ひきよせられていると、編笠の男はさらにそこでも下のほうへ向つて、耳へ手を当てていたが、

「方々かたがた、静かにしろ！」と手を振った。

そして一足跳そくとびに疾走してきながら、編笠をそこへ叩きつけ、意気軒昂けんこうな眉をあげて、

「来たぞ！ いよいよここへ」

と、語尾を強めて言ったのは、すなわち天堂一角だ。

来たとは何者？

かねて期ごしていることではあるらしいが、黒々とむらがり寄つていた人数が、思わず息を内へひそめた瞬間に、ちようどもちの木坂の下あたりからりようりよう唳々ねと夜を澄ましてくる一節切ひとよぎりの音ねのあることが分つた。

「ム！　とうとうきたな」

麓のほうをのぞみながら、お十夜と一角が、口のうちに強くうなずくと、気早に、下緒さげおを解いて、袖を引つからげた原土の面々も、

「オオ、あの一節ひとよぎり切か」

と、険けわしい目合めあ図を投げ交かわしながら、あたりの空気に氷を張らすばかり、シーンとした緊張味をみなぎらせた。

その間にも、次第に近づいてくる竹の音ねは、一味冷徹な鬼氣を流してきて、そこに、鏢つばぶるいをひそめる者、柄つかい糸へ唇をつけ、る者などの血汐をいよいよ惣毛そうけだ立たせ、いよいよ猛たけくジリジリと沸わき騒さわがせる。

周馬に襟がみをつかまれた上に、二人の原土に両腕をねじ上げられていた万吉は、もう今がすべての最期かと思った。天堂一角と本国との間に、かくも巧妙な連絡がついては所詮しよせん、剣山はおろか、徳島の城下はおろか、鳴門なるとがた瀉の磯を見ることさえ不

可能なわけ。

もとより、こうと知っていたなら、やすやすと原土どもの囲みに陥おちるのではなかった——とこみあげる無念に体をふるわせたものの、それもいわゆる噬ぜい臍せいの悔くいなるもので、かれはたちまち、お綱も自分と同じような縄目にかかるのを見ながら、数人の原土に蹴く仆ふされ、周馬だかお十夜だかに後うしろ手でに締めあげられたまま、向うの松の大木へ引きずり寄せられ胴どうし縛しばりにくくり付けられてしまった。

「それ、ぐずぐずしている間には！」と一方が急せき立つと、

「向う側へも七、八人廻れ」

「よしッ！」といつて珍らしく旅川周馬が疾駆するのを、天堂一

角が、それへ続く原士たちへ、

「静かに——」と注意して、さらにお十夜の姿をふりかえった。

「孫兵衛、ぜひと今夜はぬかつてくれるな」

「ウム、大丈夫だろう？」と気をもたせて——

「これだけの助太刀に、俺たち三人が足場を撰よつて待ちかまえて
いるんだ。諏訪すわじゃあこつちで斬りかけるとたんに、宿屋の奴や
湯番の者が拍子ひょうしぎ木なんぞ叩き廻つて、弥次馬を呼んでしまった
から取り逃がしてしまつたが、人の絶えたもちの木坂、新あらた手をか
えてこれだけの者が一太刀たちずつかすツても、たいがい息のねは止
まつてしまふだろうと思ふ」

「ただ髀肉ひにくの嘆たんにたえないのは、この場合にきて拙者うでの左腕だ」

「まだ思うように伸びないかな？」

「ほつたい繃帯は取ったが、つか柄を自由に扱うことはむずかしい。戸田流の一本使いというような型はとるが、いざとなるとどこか気力の入らぬものでな」

「ま、おれがせんで先手に斬って仆すから、しばらく形勢を眺めていてくれ」

と、孫兵衛にも、今夜は十二分な確信があるものごとく、他の者とはやや離れて、七本松のうしろヘジツと体をかがませていた。

一瞬のまに、そこは墓場ともないせきばく寂寞の地域に帰っていた。三々伍々に躍っていたあれだけの人数も、ひとり残らず姿を消し

てしまい、ガサと隠れ場所をそよがす者もない。そして、薄曇りした宵月の明りで、向うの草原にもがいているお綱と万吉だけが、視界の中に動いているものの影である。

その時、気がついてみると、いつのまにか、麓ふもとのほうからくるひとよぎり一節切の音が途切れていた。と思うと——こんどは不意に、前よりは数倍近い所に、呂りよりよ々とした音が起こって、もうその人はやがて坂の中段を横に切って行くけいりゆう溪流の丸木橋までかかってくるかと思われる。

「あ！ ……あれは山千禽やまちどり！ 山千禽……の曲」

松の根方ねかたにもがいていたお綱は、転々としながらこう叫んだ。叫んだけれど声は出ない。さいぜんお十夜のために、扱しごき帯を解か

れて猿ぐつわをかけられていた。

「ちイツ……」無駄と知りながら、お綱はもがかずにはいられなかつた。叫ばずにはいられなかつた。

「弦之丞様ア！」

必死に喉のどをからしているつもりでも、天地は森しんとして笛の音以外の何もかも伝えない。ただ、お綱の体が根笹の中にひとりでのた打つばかりである。

冷々ひえびえと樹海の空をめぐっている山嵐さんらんの声と一節切ひとよぎりの諧かいお

音おんは、はからずも神往しんおうな調和を作つて、ほとんど、自然心と人霊とを、ピツタリ結びつけてしまったかのごとく澄みきつてい

た。

木々に精せいがあるなら、花に化身けしんがあるなら、あなおもしろの交響よ！ とこの宵月に舞踊するであろう。

嘈そう々としてやまず、呂り々として尽きるところを知らぬひとよ一

節切ぎりの吹き人も、今は現うつつであるだろうか。吹いては一步、流しては一步、夜旅の興趣と、おのれの芸味に酔ちいつつ来るのだろうか。

いや、一片の風流子の心事と、法月弦之丞の心に波うつものは、大なる隔へだてがある筈だ。したがって、同じ竹枝ちくしの奏すさびにしても、その訴えるところは、巷ちまたや僧院の普化ふけたちとは必然なちがいをもつ。

かれはおそらく、この木曾の夜の道を踏んで、あの禪定寺ぜんじょうじとの頂うげに、骨を埋めている唐草銀五郎のおもかげを、目にうかべずにはいられまい。

血みどろな合掌と、銀五郎が最期の声を新たに思いうかべる時——またかかる夜かれの菩提心ぼだいしんは、知らず知らずにも一節切ひとよぎりの一曲をその靈たまに手むけさせる。

なおその呂韻りよゐんに異常な熱を加えてくると、かれの胸底あなにひそんでいる剣侠的な情感は、笛の孔あなを破るばかりな覇気をおびてほとぼしる。それは悲壮な行進の譜ふであり、かれの余裕と鬱勃うつぼつの勇を示すものだ、易水えきすいをわたる侠士きやうしの歌だ。

そうした山千禽やまちどりの曲の叫びは、かれの目指す鳴門の海にもひ

びき剣山の世阿弥が夢にも通うであろう。

その、法月弦之丞の姿は、今、もちの木坂三ツ目の曲り勾配、
からだに空谷のかけはし栈橋を渡っていた。

竹の歌口へ唇をあてながら、うつむきかげんに歩んでくる、その肩のあたり、裾すそのあたり、チラチラ影絵の雪のようにかすめて消えるものは、上の梢こずえをこして映る、淡い月影の斑ふであった。

山をめぐると坂の中腹。

月かげもない両側の崖に、道はやや急な爪つまさき先のぼりとなる。

バサリと、時々ころげてくるものは、落おちつばき椿の音だった。――

――弦之丞はこの辺から、一節切ひとよぎりを笛袋におさめて、ややしばらくの闇たどを辿る。

と、山犬のように、四、五人——七、八人ずつ——這はいつくばつた黒い影が……。

西さいぎよう行塚の平地へきて、ホツと一息入れながら、弦之丞の天蓋がクルリと後ろへ振り向いた途端に、その影は両端の草むらや岩の根に、サツと野分のわきに吹かれた草のようになびいてしまう。

一刻ときばかり前に、お綱と万吉とが立つた国分寺の触ふれ札ふだは、悪魔の囀おとりのように弦之丞の目を招いていた。そして彼もなにげなくその柵さくの側へ足を吸いよせられて行つた。

「……………」

笠の裡うちから黙読している弦之丞には、さしたる驚きようどう動も見えなかつた。むしろ、当然こうあるべきこととうなずいてもいる風。

路傍の一草のごとく、それを見て去らんとすると、その刹那だ！七本松の黒々とわだかまった闇の蔭にシートと息をこらしているかのような氷刃ひょうじんの鋭気。

踵きびすをかえして七、八歩、うしろを見るといつのまにか、そこにも狼群ろうぐんのような原土はらしが、兇刃を植えならべて、じわじわと、静から動へ移らんとする空気をみなぎらしている。

左右の草むらにも閃々せんせんたる伏刃ふくじん。

坂の上、坂の下、四方は全き剣つるぎの垣だ。法月弦之丞は、もう一歩でもゆるがせにそこを動くことはできない。

すると。

どう考えたか弦之丞、足もとの岩の上へ、ゆたりと腰を下ろし

てしまった。

同時に、天蓋をぬぎ掛絡けらくをはずし、そして、一本一本の指を握つて折り曲げた。

あたかも盲が勘をめぐらすように――。

こういう危地に陥おちた場合、かれは必ず数度の息を静かに吸つてかかる。

いかなる兇暴な殺刃でも、冷々れいれいとして騒がずに、その呼吸の支度をしている間には、容易に、斬つてかかり得ないものだ。

かれに、狐疑こぎと逡巡しゆんじゆんをいだかせ、その間に、われは心耳心と眼を研いで、悔くいなき剣の行きどころを決する。

いわゆる、胆たんまず敵をのむのである。

見えざる敵を見、聞こえざる音を聞き、光なき闇をも瞬間に察しなければならぬ。その思慮なく、おのれの勇を過信して、一人の剣を交かわし左右の敵を電でん瞬しゆんに切つて捨てたくらいでは、その寸隙すんげきに八面の殺刀が、たちどころに一人の相手を蜂の巣と刺激するに足るであろう。

弦之丞が師事し、味得しているところの、戸ヶ崎夕雲せきうんの夕雲せきう流りゆうなる剣法が、神陰しんかげとひとしく、そもそも白虎びやっこ和尚の

禅機から発足して、剣氣と禅妙の味通、生死同風の悟徹の底から生まれているだけに、あざやかなる剣を舞わす派手技はでわざよりは、まずもつて剣前に、半眼はんがんの心をいたすこと夕雲工夫の奥伝おくでんと

する。

で——今。

もちの木坂に足場をかためて、待ちもうけていた敵の重囲の中核に陥おちつつ、法月弦之丞がことさらに悠々と腰をかけたのもその心。笠掛かさかけ絡らくを地に捨てて、指の節を一本ずつ、ポキリ、ポキリと、もむようにして、四方を睥へい睨げいしているのも、まさに、その気構えをととのえているものと思われる。

しかし。

それもほんの一瞬である。

そよそよと吹く風が、およそ、二、三度鬢びんづらを撫でたほどな

秒間——。

もの蔭や草むらに、また地に匍匐ほつくしている敵の数も残らず読めた——かるが故に、その陣外にあつて、飛び道具を離す二の手はあるまい。四方に散立さんりつする大樹の梢にも、それらしい奴のよじ登つてゐる様子もないことが分つた。

うむ！ ではまず敵は周囲にある二十四、五人だな。——阿波の原士はらし——それに入りまじつてあるものは天堂一角、お十夜孫兵衛、旅川周馬。

こう、弦之丞は、心のうちでうなずいた。

諏訪すわの大湯で、かれらが自分を擁撃ようげきした後から、弦之丞はすでに前後の経過を察していた。今、道者船とり止めやの高札を見て、それが故に、さまで驚きもせず落胆もしなかつた。また、信

濃境から、後なる三人が先へ駈けぬけて行つたことにも気がついていたので、今宵の伏刃も、あらかた、かくあるべく予期していたところ。

さらば来い！

修法のものに不退転という言葉がある。

つるぎ山へ行き着こうとする目的は、ちようど彼岸^{ひがん}へ達しようと

するその信仰と一つだ。ここまで足を踏みだして来ながら、わず

か一基^きの高札文や、三、四十本の鑄^{さびがたな}刀に行き当つたからとて、

やわか、一歩でも足を後へ戻してよいものか。

山も阻^{はば}めてみよ、海も防いでみよ、阿波の関も固めてみよ。

必ず、法月弦之丞は、つるぎ山の間者牢へまで、この足を踏み

かけずにはおかぬ。

おお、それを堰せかんとすればするほど、不退転の信を強め、自己の一念の度を加えていつてみせる！

と——青年弦之丞が全身の熱血は、ここに、火ともならんほど燃えあがつて、手はおのずから腰こしがたな 刀つかの柄へかかり、胆たん、氣、力の充みちみなぎった五体は、徐々に岩を離れてヌーと伸びあがつた。

さながら、岩角に雄軀ゆうくをのばした牡獅子おじしの姿——壮であり美であつた。

そして不意に大声の一喝かつ。

「どうしたのだッ！ 卑怯な奴めら」

打つて響かせた気魄きはくの鋭さ。

これが、白皙はくせき瘦身そうしんの美丈夫、あの弦之丞こわねの声音かと疑われる。

シートと静まり返っている八方の閃刃せんじん。機を逸したか、胆のまれてしまったか、それに応じる気合いもないうちに、またかれは凜々りんりんたる語気を張つて、

「——阿波の原士はらしとは問わでも読めた。汝らの待ち伏せていた法月弦之丞はここにおるぞ。何をしびれをきらしているのか！ さッ、かかつて来いッ！ 斬りつけて来い！ さまたげのないもちの木坂はのぞむ所の足場であった。どれほど腕の精魂がつづくものか、夕雲流の八天斬りてんぎ、九地ちに死骸の山を積んでくれる！」

爛らんとした眼の向くところ、タジタジと退身ひけみに動く相手の気配が、敵ながらもどかしそうであつた。——と弦之丞は一方の物かげへ向かつて、

「——旅川周馬はいないか！ お十夜孫兵衛はその中におらぬのか！ 天堂一角はいかが致した。いつもこそそと拙者をつけ狙ねろうておるくせに、なぜ今ここへ真まつ向こうに躍り立って、いさぎよく弦之丞へ名乗りかけぬか。——ウウム！ 返辞がないな！ では逆ぎやく礼れいながら待ち伏せられたこのほうから初太刀しよだちがまいるぞツ

——

「生意気なツ」

と、初めて、怒声を叩き返したのは、ひようかん 剽悍なる原士のひとり、無謀！ 血気な太刀に風をくらわせて、せんこう 閃光とともに弦之丞の身边へ躍りかかつて行つた。

待つや久し——

つかまん 柄に満を持していた弦之丞のかたひじ 片肘、ピクリツと脈を打つたかのごとく動いて、まこう 真つ向に躍つてきた影をすくうかとみれば、バツ——とさや 鞘を脱したりげん 離弦の太刀！

それはひそやかに、後ろに廻つていたものの腰車を払つて、い 遺憾なきまでに斬つて抜け、左へ返すやいな、そう 八相の落し。

劍風一陣、もう三名が血まつりのにえ 犠牲となつた。

「わア——」

という鬨とぎの声、期せずして、山をゆるがし、皓々こうこうたる刀林とうりんをどよませてきたのは、その途端だ。

血をみて発作的にふるいあがった声——獣性も人もけじめなきかを思わする兇暴なる挑戦の猛吼もうく。

「それッ」

「相手はひとりだ！」

「鬼神ではあるまい！ ひるむなッ」

二十余名の原士の姿、ここに黒々と明らさまなる影を描き、かつ躍り、坂の下段、坂の上方から、弦之丞ひとりを挟んでミリミリと鋭えいじん刃を詰めあつた。

すでに、返り血の斑はんでん点を身に浴び、劍それ以外に何ものもな

い、無想境の神しんに入った弦之丞は、仆れ重なつた三個の死体に片足を踏まえて、

「オツ。いざ来い！」

と無銘むめいの皓刀こうとう、ふたたび、八相の天に振りかぶつて、双眸そうぼうらんらん、四面に構えた。

「むむツ」

「おおツ」

と取りかこむ数多あまたの人数——ズ、ズ、ズ、ズ——と弦之丞の周りを巡めぐつて動いていたかと思うと、坂の上手かみての者六、七人、足場のいい地勢から、かこみをくずして乱剣の太刀風荒く、いちどにドツと斬りつける！

「押しきれ！」

「退ひくなッ」

と坂の下手しもてへ廻まった者も、機を狙ねらつて切きツ尖さきをそろえ、颯さつ、颯、颯然！ 真まつ黒くろになつてなだれかかる——

劍の光は閃せん々せんと乱まれて見えたが、その時、ここ、もちの木坂の一地点——ほとんど、人と人と人とのかたまりが、一個の野のざらし晒さらしをあばき合う狼ろうぐん群のごとく眺められて、さしも、法月弦之丞、どうなつてしまったか、その群影ぐんかげに揉もみこまれて、しばらくの間というもの、かれの姿を識別しようもない。

が、それも一刻。

ワツとどよみ立ったかと思うと、すべての影がボヤツと隠れた

——四、五人斃たおれた血煙の霧だろう——と見れば刹那に弦之丞の姿、逆風劍ぎやくふうけんの切ツ尖さきを、上手かみての者の足もとに薙なぎつけて、まっしぐらに坂の上手へ踊り進んでいる。

逃げるかを見て、追いかけると、不意に、一転して立ちなおつた。こんどは地勢を改めて、すべての人数を下へ見おろし、吾から寄つて左風劍、右風の劍、無二無三に斬つてまくる。

その鋭えいじん刃になぎ立てられ、半数あまりの原士たちが、算をみだし、傷てを負つて、ドドドツ——と下り勾こうぼうい配へ押し崩れてゆくのを、夜叉やしやのごとく追いかけて、ひとりあまさず斬きり伏ふさせずにはやまないかにみえた。

思うに、今こそ、弦之丞が劍をとつての本相は、かれが平常の、

はくせきりゆうび
 白皙柳眉の柔和仮面をかなぐりすて、
 しんやしゃめん
 獅身夜叉面のおそろ
 しき本体を見するのであろう。

逃げおくれるのを跳び斬りに切ツて放し、
 なおも疾風！ 引ツ
 さげ刀！ ピューツと血糊のりをすぎきながら追つて走ると、
 そのう
 しろへ、

「待てツ、弦之丞——」

とからみついた閃光せんこうがある。そぼろ助広の閃光であつた。

「なにツ」

と坂の勾配こうばいに、惰勢だせいのついた行き足を止めて、
 ふりかえるや、
 その真眉間まみけんへ、

「かッ！」とばかり、目のくらむような気当きあてと一緒に、
 えんぴ
 猿臂のば

しにふりつけてきた岩^{がんさい}砕の太刀^{たち}。

丹^{たんせき}石流の呼吸である。

業^{わざもの}刀はそぼろ助広、持ち人^てはいうまでもないお十夜孫兵衛。

チャリン！ という音の冴え。双方の鏢^{つば}へ——鏢^{しょうぜん}然^{ぜん}として、

まッ青な火が降った。

斬^きるか、斬られるか。

やるか、とるか。

剣と剣の間には、毛髪をいれる妥協もない。

触れたがさいご、焼^{やきがね}金からシューツと青い火花が飛ぶ——火

花^{いのち}は生命の目^まばたきだ。

ひよう 豹の四肢のごとく、伸縮の自由な孫兵衛の腕ぶしには、一種の
ねんりよく 粘力があつてなかなかあなどり難い。ことには弦之丞がす
でに散々な疲労をおぼえているに反して、その氣息には新しい力が
ある。

すさまじい一合二合！　そこでガツキと鰐つばが食いあつたが弦之
丞、坂の下寄りへ廻つていたので、柄手つかでをねじつて、ひツぱずし
た。

「あつ！」と、その時、孫兵衛のほうに、不意に息が抜けたのは、
ヒタ押しに上方から鰐つばぜり競を押す気ごみであつたらしい。かれの
上体は弾はずみをくつて、坂を斜めに泳いでしまった。すると、

「おのれツ」と、また一人。

小高い所から飛び下りて、片手かぶりの大刀を、そのまま梨割なしわりにふるって落してきたのは、しんがり殿をしろと孫兵衛にいられていた、天堂一角。

いつまで周馬の現われぬのに業をにやして、もう我慢ができな
いというふうに、片手上段で飛び下りたが、早くも弦之丞、けんか剣下
を交わしてしまったのみか、すそ裾を払って、その隙に、一方の低地
へ駆け下りた。

そこは最前、弦之丞がここへ来る前に、三人を初め原士のすべ
てが、たむろをしていた草原で、わざとそこへ走ったのは、なお
闘うべく地相を選みなおしたもののか。

かれが平地へ立ちなおったのをみると、草原の隅に身を屈して

いた旅川周馬、ムクムクと身を起こして、しずかに近くへ近くへと這いまわつて行つた。——そのまに一角とお十夜は、さらに猛然と、切ツ尖さきをならべ、たとえどんなことがあるとも、今夜こそは弦之丞を刺しとめずにはおかぬという氣勢を示した。そして、先に乱離らんりとなつた原土の方も駈けあわせてきて、捲けん土重どちようらい来の手ぐすねをひき、ふたたび疲れた弦之丞を危地へ誘い込もうとする。

もう最前の場所からこの平地までの間には、弦之丞の烈れつ刀とうにあたつて血みどろになつたものが、少なくとも八、九名はのた打つている筈だが、残余の氷刃が一カ所に晃こう々こうと集しゅう立りつすると、いつこう人数が減つたとはみえない。

そのおびただしい光ものが、チカチカきらめくたびごとに、弦之丞の命が、一分二分ずつ、磨り減らされてゆくのではあるまいか——どう倫を絶した使い手にしろ、疲れぬ肉体というものを持っている筈がない。

だが、静かにそこを冷観すると、なんとという壮美な活景だろう。空には妖麗な金剛雲——地にはほのかな宵月の明り。

花には露の玉があり、草は柔らかい呼吸をしていた。そこへ、人間の生血が惜しげもなくフリまかれる。

かくて麗しい夜は夜だが、お綱は苦しい、修羅の刻々だ！ 万吉も深い血の池へ溺れこんでいるようにもがいた。二人は縛められて、松の根元を転々としながら、どうかして、縄を噛み切る

うと、さまざまに悶もたえて体を蝦えびのごとく折り曲げた。

すると、万吉の縛り付けられている松の木から、二、三間ばかり離れた所に、旅川周馬が身を折り敷いて、玉たまぐすり葉をこめ火繩を吹き、あなたにある弦之丞の姿を狙ねらって、あわや短銃の引金を引こうとしている。

「畜生！ ……」と思つたが、縄目に自由を奪われている万吉には、どうする術すべもない。

しかし、最前から、ジツと身を隠し通していた旅川周馬、引金をひいたらただ一発で、必ず弦之丞の急所を撃つてみせようとする意図なのに相違ない。

危機は間髪かんはつ！

弦之丞の致命をつかみかけている危機は、かれの身边よりむしろここにあつた。

「エエいまいましい！　みすみすそこにいる奴を眺めながら——」
と万吉の齒が下唇をかみしめた。と、かれは足を踏ん張つて、松の根元から芋虫いものように転がつた。そして、五体の肉をもがかせて、繩の伸びるかぎり周馬の方へズリ出してゆく——。

周馬はといえは、今や、構えを取つた銃つっさき先の焦点へ全念をこらしかけていたので、それとは気づかずに指へ力をこめかけると、いきなり、伸びて廻つた万吉の足が、ウム！　とその片肘かたひじを蹴払つた。

とたんに、ズドンという硝薬しょうやくのひびき。的まとを狂わせて天

空へ音波をゆすツた。

徒勞になつた轟音ごうおんに、耳をガンとさせた旅川周馬。
はからぬ邪魔をした万吉の足へ、カツと眼をいからせて、

「ちえツ、なにをしやがる！」

と、まだ余煙のからんでいる短銃をイヤというほど叩きつけた。
と——今の爆音に気がついて、旋風のごとく、そこへ猪突ちよとつし
てきた者がある。

眉まゆはあがり、髪はみだれ、氣息はあらく炎のよう——手には幾
多の生胴いきどうをかけた血あぶらのうく直刃すくはの一刀。

それを引っさげて疾駆してきた。

弦之丞である、天魔神を思わする姿である。

さながら潮うしおをさしまねくように、わツと刃じんい圍をくずして追いかかる後ろの声に振り向きもせず、来るや、そこなる周馬を目かけて、

「えーいッ」

とばかり一ちようそく跳足。

逆風を切ツて横よこな薙ぎに一ひとふ揮り、相手の胴へビューツと走つたは、

またもやあの手——弦之丞が今宵同じ手ぐちで四人までも斬つて
 いる夕雲流の逆風剣——すなわち八天てんぎ斬りと誇称されるあぶない
 切きツ尖さき。

周馬。

いきなりその剣風をくらツて、吹ツ飛ばされたかのごとく、あ
ツ——と後ろへ片足立ち、きあて氣当を返して腰の太刀を、
「おうツ」とすぐに抜きあわしたが、無論、自分の体をたい退ひいてい
るので、その払いは虚にして空、キリキリ舞いをやったにすぎな
い。

もう一步——その刹那に、弦之丞の返し太刀が、足とともにふ
つて落されたら、旅川周馬、その時、梨か竹かのように二ツに割
られている筈である。

だが、すぐ後へ——お十夜と一角がでんち電馳して来た。原士の乱刃
が迫っていた。

で——弦之丞はその寸すんげき隙を惜しんだのであろう。周馬へまい

る余地のある太刀を、ヒラリと返して横へ駈けるや、そこに仆れていた万吉の縄目を、プツリと斬つて孫兵衛と一角のほうを防いだ。

何か、異様な叫びをあげて——まったく何を叫んだか分らない——はね上がった目明しの万吉は、お綱のそばへ転げて行つて、次にかれの縄を切つた。

猿ぐつわを振りほどくと、お綱は、吾を忘れて、弦之丞の名を呼んだ。

弦之丞も、無論、それをお綱の声と聞いたであろう。だが、周馬、一角、お十夜——こう三人の鋭えいじん刃を前にして、かれは死力に汗をしばっていた場合であるから、或いは、聞こえなかつたか

も知れない。

万吉は新手の意気ごみで、道中差の鞆さらやを払った。お綱もまた、母のかたみであり、劍山に辿りついた時、父の世阿弥に名のるべき唯一の証しるしとして、愛護してきたあの銘刀へ手をかけた。

かくて――

春月を隠した美しい金剛雲の下で、その夜、惜し気もなく犠牲にえに散らされた鮮血が、どこまで、もちの木坂満地まんちの若草くれなを紅にしたことか？ ……。

やがて、刃影の跳躍も、一場の夢幻となつてかき消えた。そして、木曾の往還は何ごともしなかつたように夜が明ける。

小荷駄こにだの鈴が街道の朝を知らせ、小禽ことりが愉快にさえずりだした。

真昼の太陽に草の露が乾くころには、ぼくじゆう墨汁をこぼしたかと思
 われる道ばたの血痕も、ばてい馬蹄やわらじのつちぼこり土埃におお蔽われて、誰
 の目にも、ゆうべの修羅が気づかれない。

幾つもの死骸やておい負傷はどこへ運び去られて行ったか、夜明けの
 前に手ぎわよく片づけられていたのである。で、すべての旅人は
 みな常と変りはなく、もちの木坂を通りすぎたが、敏覚な虫類—
 —あぶ虻や蝶やてんとむし太陽虫などはいたる所の草の根から、おもて面をそむけて
 飛んでいた。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2008（平成20）年12月24日第22刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年2月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

木曾の巻

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>